

南部拠点地区遺跡群No.7

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

調査地点



遠くに霞む浅間山と南部拠点地区遺跡群No.7



前橋台地を貫流する利根川と南部拠点地区遺跡群No.7

例 言

1. 本書は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業（道路建設工事）に伴う南部拠点地区遺跡群No.7の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業組合の委託を受け、前橋市教育委員会文化財保護課の指導のもと山下工業株式会社（代表取締役 山下 尚）が実施した。
3. 発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業組合の費用負担によって行われた。
4. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地 群馬県前橋市鶴光路町121-2、121-3、122-5、959-2、960-3

前橋市亀里町 1002-3、1003-2、1003-3、1004-2、1005-3、1006-2、1006-3、

1007-3、1007-6、107-7

遺跡コード 25G81

調査面積 5,850m²

調査期間 平成25年11月18日～平成26年1月22日

整理期間 平成26年1月23日～平成26年3月20日

調査担当者 櫻井和哉（山下工業株式会社）

5. 地質調査及び本書の自然科学院分析は株式会社火山灰考古学研究所に依頼した。

6. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会に保管してある。

7. 本書の編集執筆はIを福田貞之（前橋市教育委員会）が行い、その他を櫻井和哉が担当した。

8. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関・諸氏からのご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業 青木利文 井上 太 女屋和志雄 鈴木徳雄 早田 勉

田中陣明 長井正欣 中村岳彦 日沖剛史

凡 例

1. 表紙に2006年国土地理院撮影の空中写真を編集・加工し使用した。
2. 採用に建設省国土地理院発行の1:25,000地形図（ダウンロード最新版）、昭和43年前橋市都市計画図、平成21年前橋市都市計画図を編集・加工し使用した。
3. 遺跡・全体図におけるX・Y値は、平面直角座標系（世界測地系）の座標値、採図中の北は座標北である。
4. 遺構略称は以下のとおりである。

【溝】・・W 【土坑】・・D 【ピット】・・P

5. 遺構・遺物の計測値は、（ ）は推定値、〔 〕は残存値で示している。

6. 上層色調の表記は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修）に基づく。

7. 本書で用いる示標テフラの略称と年代は以下のとおりである。

【浅間A軽石】 As - A 天明3年（1783）

【浅間B軽石】 As - B 天仁元年（1108）

【榛名二ツ岳-渋川テフラ】 Hir - FA 6世紀初頭

【浅間C軽石】 As - C 3世紀末～4世紀初頭

【浅間板鼻黄色軽石】 As - YP 約1.5～1.65万年前

【浅間大塙沢第1軽石】 As - Ok1 約1.7万年前

【浅間板鼻褐色軽石】 As - BP 約1.9～2.4万年前

目 次

図 絵

例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の地理的・歴史的環境	1
III 調査の方法と経過	4
IV 基本層序	5
V 調査の概要	6
VI 総括	11
付編 自然科学分析	31

写真図版

報告書抄録



Fig.1 調査区位置図

I 調査に至る経緯

平成25年6月5日付けで前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合より埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出され、同年7月3日～8月30日にかけて試掘調査を実施し、浅間B軽石で覆われた水田跡を確認した。試掘調査に際しては、開発面積が広大であるため原則20mピッチでトレンチを設定し、重機により造構確認を行なった。なお、試掘面積は8,659m²であった。試掘調査の結果を受け、埋蔵文化財の保護について協議を重ねたが、設計変更は不可能であるため発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることで合意を得た。前橋市教育委員会では既に直営による発掘調査を実施しており、直営による調査の実施が困難であるため、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、前橋市教育委員会の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することになり、平成25年11月12日付けで前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合、民間調査組織である山下工業株式会社、前橋市教育委員会との間で発掘調査実施に関する協定書が締結され、同年11月18日から現地調査が開始された。

II 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

南部拠点地区遺跡群No.1は、標高約78m、JR前橋駅から南南東に約6km、北関東自動車道前橋南ICの西方750mの場所に位置している。遺跡が所在する前橋市南部は、近代市街化が進み景観を変えつつあるが、今なお広域に水田地帯が認められる地域である。

本遺跡は地形的には前橋台地上に立地する。この前橋泥流は約2万年前に遡る浅間山の火山活動によってもたらされた前橋泥流が生成した削状地状の地形である。台地面は概ね北西～南東方向に地形の傾斜に沿って流れた中小河川によって冲積化が進んだと考えられる。また、この様に形成された地形を利根川が分断するかたちで台地上を貫流している。その流域に沿って周囲に若干の地形変化をもたらしている。台地上では水田地帯は埋没道路や後背湿地を中心に展開し、自然堤防などの微高地に集落が占地する。この傾向は近代化の著しい現在においても空中写真などから読み取ることができる。調査地点の原状は水田であったが、この周辺を灌漑するのが端気川であり、前橋市南部の農耕地帯を伝統的に潤してきた主要な幹線用水路である(註1)。

(註1) 利根川は、本来は前橋台地北東に広がる広瀬川低地帯を流れているが、15～16世紀の洪水を契機に全流し、現在の流域が形成されたと考えられている。

(註2) 端気川は広瀬川十六木堰から取水、その後、後瀬用水(宮川)や柳島用水など多数の灌漑用水を分けながら流下して、流域は前橋市下阿賀町に至り利根川に注ぐ。本来は台地上を南東流する流域を人工的に付け替え用水路としたものであり、その利根川改修は古代に遡る可能性も想定されている。

2. 歴史的環境

古墳時代 前橋台地上の水田開発は古墳時代から本格的に開始される。近年増加傾向にあるAs-C-Hr-FA-Hr-FPなどのテフラやこれに伴う泥流堆積物を縦層に確認される水田遺構の検出事例は、前橋台地上において古墳時代を通じて水田耕作が営まれたことの証左である。この時期の水田の耕地形態は一枚の区画の面積が狭い小区域水田の形態をとり、地形に適応させて配される。また、灌漑には当時前橋台地の表層を流れていた小規模な自然河川を用いたと想定される(註1)。水田開発には用排水路の整備は不可欠であるが、前川で既にそれが大規模に行われていた形跡がある。徳丸仲田遺跡G区6号溝やその南東に所在する玉村町砂町遺跡7号溝は同一の遺構で、開発年代が古墳時代前期に遡る可能性が指摘されている。この大溝は遺跡面積約2kmを繋ぐ長大な構造物と見なすことができ、その開発の規模を推し量れる。また、広瀬川低地帯旧利根川からの引水遺構とされ

る I 号女溝の開墾年代は古墳時代後期に推定されている。こうした大溝は、古墳時代において前橋台地上を流れる自然河川の灌漑面積の拡大や用水量を補完するものであり、該期の水田開発を漸進させる性格があったと思われる。

古墳時代以降、前橋台地上で広域に水田開発が展開した事は集落遺跡の分布からも類推される。弥生時代後期では櫛島川端遺跡や越丸仲田遺跡などで遺構・遺物が少數確認される程度なのにに対し、古墳時代前期に至ると低地帯を臨む微高地に広範囲に急激な遺跡の増加が認められる。少々異質な現象で、地域における開発史・景観史上の西湖と見做すことができる。古墳時代中期^(注2)・後期も同様に依然として多数の集落遺跡を確認でき、集落占地の傾向を大きく変えることなく推移するように見受けられる^(注3)。

古代以降 律令期以降、前橋台地上の水田可耕域では条里型地割の施工が開始される。木遺跡周辺では、前橋長瀬線改築工事、北関東自動車道建設、南部拠点地区土地区画整理事業などに伴う一連の発掘調査において、As-B 直下での水田跡の調査事例が豊富であり、その成果から12世紀初頭の段階で台地上にはかなり広域に条里型地割が展開していた様子が明らかとなっている。前橋台地では昭和の時代に至るまで表層には条里型地割の名残を留めていたが、その農業景観の基層は、この古代の時点で既に形成されていたといえる。現状、条里の施工年代がどこまで遡及するのかは定かではないが、前橋市周辺地域で施工年代の推定が可能な事例として玉村町砂町遺跡、前橋市中原遺跡群、前橋市西田遺跡などがある。砂町遺跡では大畦畔中から 8 世紀後半の土師器坏が出上り、中原遺跡群では弘仁九年（818）の洪水層下に条里水田が検出され、その水田層の下に 8 世紀末から 9 世紀初頭の住居跡の存在が確認されている。また、西田遺跡は 9 世紀後半の堅穴住居跡の上層に As-B に被覆される水田跡を検出している。この様に条里の施工年代は古いもので 8 世紀に遡る事例もあるが、一様でなく地域によって相違があった様子が窺い知れる^(注4)。なお、条里施工にかかる開発では、微高地を削平するなど自然地形を造成し耕地化することもあったようである^(注5)。また、一面にわたり人工的な方格区画を連鎖させる耕地の存在形態は、従来の灌漑体系の更新を迫るものであり、自然河川の流路変更や新たな溝渠の開発を伴って体系的に用排水系統を整備する必要もあったであろう。こうした耕地形態や用水系統の改変には一定の計画性に基づく大規模な土木事業を伴った可能性が想起される。

該域の集落の動向であるが、7 世紀後半から 8 世紀にかけての集落遺跡の事例が少ない点が指摘される。現状では、公田東遺跡・公田池尻遺跡・朝倉工業団地遺跡群・朝倉伊勢西 No.2 遺跡などに集落の分布が認められる。しかし、管見に触れる限りではこの時期の集落遺跡の調査事例を多くは確認できない。一方で 9 世紀以降、とりわけ 9 世紀後半からは、台地面の微高地に多数の集落の分布が認められる。この事は先に触れた 7 世紀から 8 世紀にかけての集落の調査事例が少ない状況と比べると対照的である。こうした古代の集落遺跡の分布状況は、何かしらの政治的・歴史的背景に起因するのかもしれないが、それが調査地点の偏りや調査面積の広狭による場合も想定されるところであり、今後の検討の余地を残すものであると思われる。

(註1) 公田東遺跡のⅡ区 1 号河道には複数の構築物の痕跡が検出され、篠山仲田遺跡 J 区の藤川旧流路には水辺祭祀が想定される遺物の出土をみるとことから、当時の人間活動と自然河川の関わりを窺い知ることができる。

(註2) 和泉式周に比定されるものが少なく明確に識別できていない。中庸と採えたものはほとんどは鬼禹式の初現的な接棒を見るものである。

(註3) 一方で横手早稲田遺跡の後に後衛には農耕城が水田化し、山王ど苦遺跡のように前期の農耕が後期には墓域に転換するなど、明らかに土地の利用形態を変える場合もある。こうした集落移動の契機や要因を探っていく必要もあると思われる。

(註4) 「日本三代実記」に「貞觀八年廿七日辛丑、上野櫛井、從五位上行介安信朝臣貞行貢實百姓、開發田四百石十町、太政官處分、本東之間、爲地丁田」（『群馬県史』資料編 4）の記述がある。866 年に上野国守安信朝臣貞行が開発させた 447 口の水田を貢給するまでのあいだ地子出とするという意味のようである。ここで開墾された水田がいざこの水田を指すかは不明だが、9 世紀後半時点での開発の実態を示す資料として挙げておきたい。

(註5) 公田東遺跡の事例にみるように古墳時代の集落城が、律令制の開拓で水田化される事例も散見されるところである。先述した西田遺跡の事例も集落の立地する微高地を削平して開拓したものである。

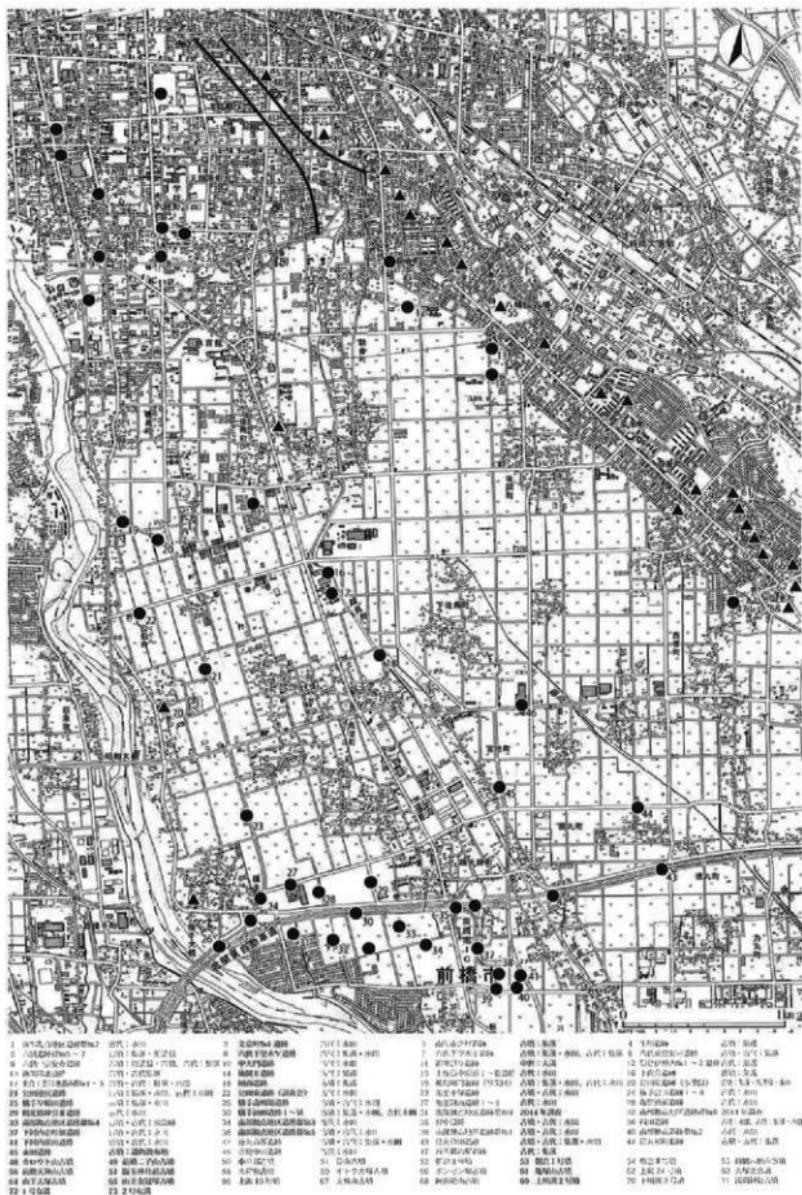


Fig.2 周辺の遺跡（3万分の1）

III 調査の方法と経過

調査の概要 今回の調査は前橋市南部拠点西地区上地区面積整理事業地区内における道路建設工事に伴うものであり、調査対象面積は5,850m²である。前橋市教育委員会（以下市教委とする。）試掘調査の結果から、発掘調査はAs-B直下面（1面目、平安時代）での水田遺構の検出及び市教委指定箇所に設定したトレーンチ内におけるHr-FAまたはその泥流層の直下面（2面目、古墳時代後期）での水田遺構の確認という仕様で計画された。しかし、2面目トレーンチ調査については、対象区域に遺構検出の鍵層となるHr-FAまたはその泥流層の堆積が無かったことから、市教委と協議の上、取り止めた。これに代替するかたちで任意の3ヵ所にトレーンチを再設定後、深掘りし、本遺跡の基盤までの基本層序の観察・記録を行うこととした（Fig. 3）。この際、検出した土層に年代比定を行ったため、地質調査、テフラ分析を実施した。

発掘調査区とグリッドの設定 調査対象区域は、現道や農業用排水路、暗渠などの埋設物によって分断される。発掘作業中は管理及び進行上の支障が無かったため区分けをしなかったが、整理作業の段階で、報告書編集上の都合から、この分断に合わせて調査区を分割し、それぞれに名称を付した（Fig. 4～5）。グリッドは、過年度調査の南部拠点地区遺跡群N-1遺跡において設定されたものを踏襲し使用した。このグリッドの起点は北西角にあり、座標値はX=37,300、Y=-67,400である。なお、この座標値は平面直角座標系（世界測地系）に基づく。

調査方法 1面目の表土除去および2面目の試掘トレーンチ掘削にはバックホーを用いた。1面目の表土除去ではAs-B一次堆積層より上層を表土として扱い掘削した。車機による表土掘削作業に並行させ、人力によるAs-B除去作業も実施し、軽石層直下の平安時代水田跡の検出を行った。調査の設計上、上層から掘り込まれる遺構も同一面での検出となるため、覆土の識別から遺構の帰属年代を把握した上で掘り下げた。なお、検出した畦畔の内、一部のものはちぎ割って畦畔及び水田面下部の堆積状況の観察などの補足調査を行った。

養生等 遺構面の乾燥、凍結、降霜による作業効率の低下や畦畔及び水田面の損傷を防ぐため、1面目水田跡調査時は調査区全域をブルーシートで被覆し状態の保全に努めた。この際、10m四方の大形のブルーシートを多用する、不要なシートの開け閉めが生じないように作業手順を工夫するなど、養生にかかる作業が、実質の発掘作業時間を圧迫しないように心掛けた。

遺構測量 遺構平面図の作成はトータルステーションを用いて行い、縮尺1/40で作成した。土層断面図・エレベーション図などは実測し、手描きの原図を縮尺1/20で作成した。

写真撮影 遺構個別の全景、土層断面などの写真記録はアナログカメラ（35mmモノクロネガ・カラーポジ）とデジタルカメラを併用して行った。調査区の全景撮影は平安時代水田跡の検出完了に合わせて、ラジコンヘリを用いて上空から行った。

自然科学分析 2面目試掘トレーンチ調査での地質調査・テフラ分析は（株）火山灰考古学研究所に依頼した。

調査経過 発掘作業と整理作業の経過は概ね以下の通りである。

Tab.1 調査経過

発掘作業期間	平成25年11月18日～平成26年1月22日	整理作業期間	平成26年1月23日～平成26年3月20日
準備作業	11月18日～11月29	遺物洗浄・注記作業	1月23日～1月28日
表土除去	12月3日～12月27日	遺構回収	1月29日～2月10日
基準点設置	12月3日～12月8日	遺構回復	2月10日～2月21日
遺構調査	12月3日～1月16日	遺構デジタルトレース	2月17日～2月21日
地上測量	1月8日～1月22日	遺物図作成	2月20日～2月21日
空中写真撮影	1月8日	報告書作成	2月24日～3月20日
試掘トレーンチ調査（2面目）	1月9日～1月14日	戻稿執筆	3月3日～3月19日
地質調査・テフラ分析	1月14日	遺物写真撮影	3月19日
完了立会い	1月16日	人稿	3月20日

IV 基本層序

I 区と II 区では基本層序を構成する土層の枚数に相違があり、また、同じ区域内においても層厚や層相の違いが認められる。そのため、基本層序を示す柱状図は、煩雑ではあるが各区それぞれに層序関係を概念的に把握した上で模式化して作成した (Fig. 3)。土層の番号を各区それぞれに付したことから、同一の土層であってもそれぞれの調査区における柱状図で番号が異なっている場合もある。よって、ここでは、両調査区で重複する上層の対応を図りながら、本遺跡の基本土層について概説することとした。

I 区 I 区の層序及び堆積状況は概ね以下の通りである。

I 層は圃場整備以後の現代水田作土、II 層は圃場整備に伴う整地層、III 層は圃場整備以前の水田作土で、これらの上層は As - A を含む。IV ~ V 層は灰色シルト質砂、灰色砂を基質とし、中～近世の利根川の氾濫に関連する土層であると判断される。As - A は含まず、As - B の混入も明瞭ではない (注 1)。VI 層は上層と同じく灰色砂をベースとするが、色調暗く As - B を均質に含み攪拌された印象を受けることから、耕作土の可能性も想定される。VII 層は As - B を常に含む粗粒でやや腐殖質の土層である。1 面目で検出したピット・土坑のほとんどが本層をベースとした黒褐色～暗褐色土を覆土としている。そのため本来は安定した堆積があったと思われるが、現状では層序薄ぐ地点によっては堆積が認められない。上層からの人為的な攪拌による削平や漫食による土壤の流出などの理由によるものであろうか。VIII 層は As - B の一次堆積層。層厚 0 ~ 10cm 程度で確認される。IX 層は腐殖質の粘土またはシルトで平安時代水田作土に対応する。X 層は粘土層だがやや砂質である。洪流水堆積物に起因するものかもしれない。また、本層に微量含まれる白色軽石は、Hr - FA または Hr - FP であると思われる。XI ~ XIII 層は粘土質の水成層である。Hr - FA や As - C 隆盛年代に対応する土層を含むと思われるが、肉眼での観察ではその堆積や混入を認ることはできない。しかし、テフラ検出分析の結果、IX 層は角閃石が認められることから、Hr - FA 以降の形成であると判断される。XIII 層は洪流水堆積物の可能性がある (注 2)。XIV 層は、多量の白色砂粒が混入するのが特徴的な砂質粘土層である。本層に含まれる白色砂粒は、テフラ分析の結果、As - YP に同定された。XV 層は角閃石・並角閃石・赤色砂が少量混入する粘土質シルト層で、テフラ分析の結果、上層から As - Ok1 に同定されるテフラ層、下層から As - BP に推定されるテフラが検出された (注 3)。

II 区 II 区の堆積状況は概ね以下の通りである。

I ~ II 層は I 区のものにそれぞれ対応する。III 層～IV 層は圃場整備以前の現代水田作土の下層土で、灰色の砂質土がベースで洪流水砂を起源とするが、As - B を均質に含み攪拌された印象を受けることから、耕作土の可能性も想定される。V ~ VII 層は 1 号 sondage の範囲でのみ観察され、V 層は灰色の砂質土で層相が I 区の IV ~ VI 層に類似するが、同時期の形成であるかは不明である。VI ~ VII 層は I 区 VII 層に対応する As - B 混土、VII ~ XIII 層は I 区のものにそれぞれ対応する。XII ~ XV 層は粘土質の水成層で、XV 層は I 区 XIII 層に対応する。XV ~ XVI 層は砂質の水成層で、2 面目試掘 B ドレンチで 1 号 sondage の下に検出した堆積流路を埋める土層である。XVI 層は I 区 XVI 層、XVII 層は I 区 XV 層にそれぞれ対応する。XVII 層は、II 区試掘 B ドレンチの深掘りの結果検出した上層である。非常に硬く締まった黄褐色砂礫層であり、バックホーでもなまなかには掘り下がらない様子であった。検出後、すぐに満水し水没したため詳細な観察には至らなかったが、上層で上から As - YP (I 区 XVII 層、II 区 XVII 層)、As - Ok1 (I 区 XV 层、II 区 XVII 層)、As - BP (I 区 XV 层、II 区 XVII 層) の順でテフラが検出されていることから本層は前橋泥流堆積物に比定される。

(注 1) 横手南川端遺跡・横手油田遺跡 IV ~ V 層に相当すると想われるが、記載されている土層の枚数や層序に相違があるため正確な対応は難しいと思われる。

(注 2) 早田勉氏から鎌文時代の洪流水層である可能性を示唆された。

(注 3) 基質が灰白色のシルトであったため、当初単一の I 層と誤認していた。テフラ検出分析の結果を受けて複数枚の土層が重複したものであることを認識した。また、本層は、層序・層相から南部拠点地区遺跡群 No. 4 X 層、横手南川遺跡・横手油田遺跡 X XII 層、西面遺跡・村中遺跡 X 層に対応されると思われる。

V 調査の概要

1. I 区の概要

開発区域を南北に縱断する農業排水路を境に西側を I 区と呼称した。また道路や暗渠などの地下埋設物による分断に合わせ、更に 7 分割しそれぞれに枝番を付した (Fig. 4 ~ 5)。I 区の調査では As - B (Ⅷ 層) 一次堆積層直下に平安時代末期の水出跡を検出し、同一面 (IX 層上面) で中世から現代にかけての溝跡・土坑・ピットを検出した。

a. As - B 直下の遺構

水田跡 (Fig. 6 ~ 10)

検出状態 軽石下に検出された畦畔や溝跡の分布から、水田跡は概ね I 区全域に展開するものと判断される。畦畔は状態の良好なものは田面からの比高差約 5 cm 程度で高まりを認識することもできる。しかし、全体的には畦畔の高まりは低く捉えづらいものが多い。途中で途切れで区画を構成しないものもしばしば見受けられる。上層からの圧密により水田面が変形し、扁平化した結果と推測される (iii)。また、水面面から耕作痕や足跡列として明瞭なものは検出されなかった。

水田面の地形 ほぼ平坦な地形だが、標高は区域内の最高点で約 77.75m、最低点で約 76.70m、比高差約 105cm を測る。地形は北西から南東に向かって低くなり、平均勾配は約 0.4% 弱、傾斜角を変えることなく緩やかに傾斜している。

条里坪線に対応する畦畔と溝渠 調査地点周辺では米軍写真や昭和 43 年前橋市都市計画図にみる表層地割（以下、米軍写真以降圃場整備以前の地割を表層地割とだけ表記する。）に条里型の上地区画は認められない。しかし、検出した畦畔や溝渠の中には条里の坪界に対応すると判断されるものが含まれている。5・10・25・26 号畦、W-29 がそれに該当し、走向、位置関係から、約 5 坪分が I 区の調査区域にまたがって復元される。また、復元された条里坪に対し、便宜上、それぞれ区画①～⑤までの番号を付した。以下、これらの畦畔・溝渠についての所見を詳述する。

5 号畦 I 区 d・g で検出した。坪界に対応する東西畦畔である。畦畔の隆起は、I 区 d では比較的捉えやすいが、I 区 g ではほとんど扁平化している。並走する 2 条 1 対の畦畔で、1 条が下幅で、北側が 60 ~ 88cm、南側で 56 ~ 128cm 程度である。畦間が水路として利用され、溝の基底面は西から東へ緩やかに傾斜している。また最下層に黒色泥の堆積が観察される。I 区 d で座標北に対し 82 度東に、I 区 g では 77 度西に傾く走向を示し、坪界は直進せず若干蛇行し変形を受けている。

25 号畦 I 区 a で検出した。坪界に対応する南北畦畔である。畦畔は、やや扁平化し捉えづらい。並走する 2 条 1 対の畦畔で、畦幅は西側が区域外及び消失のため不明だが、東側が下幅で約 168cm と幅広である。畦間が水路として利用され、溝の基底面はほぼ平坦だが、北から南へ向かうわずかな傾斜が看取される。座標北に対し西に 3 度傾き、区域内では直線的な走向を示す。同じ坪界畦畔である 26 号と交差し、坪交点 (座標値 X = 37,007.5, Y = -66,658.4) を成す。

26 号畦 I 区 a で検出した。坪界に対応する東西畦畔である。畦畔の隆起は、西側で明瞭だが、東へ向かって田面との比高差を減じる傾向があり、X = 202 以東はほとんど高まりを看取できない。1 条の畦畔で坪界を成し、やや幅広で下幅最大約 134cm を測る。座標北に対し東へ 90 度から 93 度に傾き、ほぼ東西に直線的な走向を示す。しかし、X = 194 ~ X = 196 付近では、若干北側にせり出す様子が窺われ、畦幅もここでは 56cm 程度まで狭せている。継続的な耕作に伴う変形の結果と解釈される。畦の南脇に沿って導水路状の浅い凹みが部分的に観察される。また、29・30 号が分岐する位置で畦畔上から置石が検出された。西端が同じ坪界畦畔である 25 号と交差し、

坪交点（座標値 X = 37,007.5, Y = -66,658.4）をなす。

10号畦 I 区 c・f で検出した。坪界に対応する南北畦畔である。畦畔の高まりは低いが比較的明瞭に捉えられる。1 条の畦畔で、畦幅は下幅で 70~90cm 程度で坪内を区画する畦畔と変わらず幅狭な印象を受けるが、25号畦から概ね 1 町分東の位置に走向をとるため、坪界に対応するものと判断した。

W-29 I 区 e で検出した。坪界に対応する東西の溝渠で、本木 I 区を東西に全通したと考えられる。しかし、この坪境は、As-B 降灰以降、後述する 1・4・5・6・7 号溝など多数の溝渠に継承され、これらが並走し切り合っている。開削が繰り返される過程で損傷を受けたと考えられ、西側 I 区 b では検出されなかつたと判断される。調査区西壁断面に、溝の両脇に畦畔状の隆起が観察されることから、坪界は、5・25号畦と同様に本来 2 条 1 対の並走する畦畔で、畦間の小溝を水路として利用する構造であったと推察される。溝の底面は西から東へ緩やかに傾斜している。座標北に対し 87 度東へ傾き、ほぼ東西方向に直線的な走向を示す。

坪割内の区画 今回の調査対象区域では As-B 下であっても畦畔の検出がない区域があり、また I 区 b～g のように調査区形状が細長であるなど水田区画の形状・規模については明確にできない側面がある。しかしあげられた畦畔の走向から、概ね次のような傾向を指摘することが可能である。南北畦畔（以下、縦畦）は 32 号畦のように湾曲する変則的な走向のものがあるが、大抵は条里坪線に沿い平行で、多少の振れ幅は認められるがほぼ南北軸の走向を示す。条里坪線との対応から相対的に強い区画性が窺われるものの、I 区 a で検出した区画①内の縦畦 27・29・33・34 号畦および区画②内の縦畦 30・31 号畦の位置関係からは、必ずしも「長地型」や「半折型」といった土地区画に基づく様子は窺れない。縦畦に交差する東西方向の畦畔（以下、横畦）は、主軸方位の振れ幅が大きく、また大抵は北東-南西軸で条里地割に対して斜行する走向を示す傾向がある。横畦はむしろ等高線に対して並走していることから、地形傾斜に対応した、つまり、湛水面の維持のために合理的に配されたものと推察される（図 2）。

灌漑の方法について 5・25 号畦に付随する小溝や W-29 は基幹用水路から分水される各坪への給水を目的とした導水路であると判断される。また、水口・水尻など取排水に関わる施設（以下、水口状遺構とする。）として 25 号畦、26 号畦の坪交点に確認されるもの（Fig.11）のほか、坪割内の区画で 8ヶ所に水口状の畦畔の途切れを確認した（Fig.12）。坪交点に確認される水口状遺構は区画①の南西隅と区画②の北西隅に認められる。区画①のものは 25 号畦東半を横断する形で小溝状の凹みとして検出された。本来は 25 号畦に伴う水路に通じていたと思われるが、遺存状態が悪く不詳である。取水口としては位置的に合理性が認められず、坪内の余水を落とす排水口の可能性もあるが、水田面は西から東へ低くなるため、機能の実態については判断がつかない。区画②のものは、ピット状の浅い凹み 3 基を列点状に、25 号畦東半を横断する形で検出したものである。本来は 25 号畦に伴う水路に接続する小溝状の遺構であったと想定される。遺存状態が悪く構造は不詳ながら、水田区画との配水上の合理的な位置関係から区画②に引水する取水口であった可能性が高いと判断される。坪区画内に検出された水口状遺構の内、水口 A は明瞭な畦畔に途切れが看取されるものの、水口 B との位置関係や設置箇所の合理性の観点から、遺構と認定するには疑念が残る。水口 C は水上側にその開口部に向かう 26 号畦南脇を並走する小溝から分歧する導水路状の小溝を伴っている。また、水流によって形成されたと推測される植鉢状の凹みも観察される。なお、地形的な制約から、水田区画への灌漑は原則的に北から南へ、西から東へなされる傾向があったと考えられる。また、5・25 号畦に見られる小溝の水源（a）は北ないしは北西方向に想定される。

畦畔断割りの状況 水田面下層の状態の観察のため、5・10・11・14・25・26・32・35 号畦といった一部の畦畔を対象に断割りを行い、土層断面の観察を行った。仄層が水田作土で層厚は 6~10cm 未満と薄い。畦畔もこの仄層と同質の土層で構成されており、区分は難しい。X 層が仄層作土の下層に対応し、層厚 10cm 程度である。なお、鰐床層の形成は不明瞭で識別できない。下層土での酸化鉄の斑紋の発達もまばらである（図 4）。また、土層断面上に畦畔の造り替えなどの痕跡が検出される可能性も想定したが、積極的にそれと認められる状態は見出せ

なかった (a)。

溝跡 (Fig.12~14) W-2・3・8・9・24・26がAs-B直下に検出した溝跡である。W-2・3は共に北西-南東軸の走向で、底面は北西から南東へ向かって低くなっている。W-24は概ね南北軸の走向だが中程で西に向きを変える。溝の底面は北から南に向かって低くなっている。W-26は東西軸の走向で、底面は東から西へ低くなっている。断面形状はいずれのものも浅く皿状である。こうしたW-2・3・24・26のような溝跡は、しばしば畦畔脇に検出される小溝で、扁平化のため畦畔の高まりが認識できない状況を示しているかもしれないが、断定はできない。W-8・9は共に概ね南北軸の走向を示し、両者は隣接し並走する位置関係にある。断面形状は浅く皿状である。用途・機能については不明である。上層からの圧密による陥没の可能性も想起されたが、As-Bの堆積厚が平坦面でのそれに比べて厚いため、これら遺構の水田跡と同時期のものとして捉えることができる。

(註1) I区a東及び南東、I区b南西、I区cでは畦畔など遺構の検出が認められないが、この土庄による水田面の変形によって扁平化し、遺構が捉えられなかった可能性も想定される。

(註2) I区f～gでは横壁が幅広に配置されているが、これも同様に渠水堰を確保するために矩形的な制約を解消するためのものとも解釈しうるもの、I区f～g間の平均勾配にとりわけ周囲との相違が認められるわけではない。

(註3) 例えば基幹用水路からの分水点など。

(註4) II層は現代の、IV層は圃場整備以前の水田作土に対応するトレンチだが、これらの土層は鉄分の沈着が著しく黄褐色～橙褐色に変色しているとの推測である。

(註5) 圮界畦畔である25号柱(B-B')、D-D'の水田基底面では、他のものが比較的平坦であったに対し、落ち込み状の窪みや凹凸が看取される。何かしらの遺構や人為的な痕跡を示唆する可能性もあるが、断片的でこれについても判断がつかない。部分的であれ平面的に顕り下に積重し、下層遺構の確認を行う必要もあったかもしれない。

b. As-B上層の遺構

溝跡 (Fig.13~14) W-1・4～7・10～14・25・27・28がAs-B上層から掘り込まれる溝跡である。これらの溝跡はその走向から、条里坪線に沿ったもの、表層地割に沿ったもの、条里坪線・表層地割のどちらにも対応しないものの3種類に分類される。条里坪線に沿ったものにはW-1・4～7が挙げられ、これらは区画②と区画③の坪界に沿って検出された。いずれも出土遺物なく遺構の正確な帰属年代は不明なもの、基本層序との対比からそれぞれの前後関係についてはある程度類推でき、古い方からW-7、W-4、W-1、W-5の順序で把握することが可能である。W-6はVI層に被覆されることから、W-1・4と近い年代の所産と思われるが、平・断面とともにこれらとの区域内での重複が認められず、新旧関係は明らかにできなかった。また、これら溝跡の中で一番新しいW-5は埋没後、V層によって被覆されている。表層地割に沿ったものにはW-10・12・27・28が挙げられ、調査区壁面の断面観察から、全て圃場整備以前まで機能したと判断され、全てIV層上層から掘り込まれている。条里坪線・表層地割どちらにも対応しないものにW-11・13・14・25がある。W-11はIV層に被覆されV層を掘り込んでいる。南北軸の走向を示すため、条里型地割との関連を窺わせるが、部分的な検出のため判じ難い。またW-25は検出位置や覆土の類似からW-11から分岐した溝跡であると判断される。W-13・14はW-12と並走する。これらの溝跡はW-12が切るAs-A混耕作層(3層)に被覆されたため、W-12よりも古く、これに先行するある時期における地割を形成していたものであると判断される。遺構の年代は不詳だがVI層形成以降の所産である。今回検査した範囲ではAs-B降灰以降の溝跡は、V層より下層のものには、条里型地割に沿ったものが認められるが、V層形成以後のものにはその対応が見られない。また、IV層を掘り込むものは、全て表層地割に対応するものであることが指摘される。つまり、調査地点周辺の耕地区画は、As-B降灰以降、V層形成までの間は条里型地割が維持されている可能性が示唆されるが、IV層形成後では条里型の区画とは無関係な表層地割と同じ耕地形態を成している言い換えることができる。

土坑・ピット (Fig.14) 土坑8基、ピット62基を検出した。D-3・P-21がAs-A混土である以外はすべて覆土がV層をベースとした粗粒の黒褐色～暗褐色土で概ね中世の所産であると把握される。不整形なものが多

く、形状や配列に規則性は認めがたいが、中には覆土にⅩ～Ⅺ層を偽縫で含むようなものも認められるため、人為的に形成されたものであると思われる。降灰後の復旧や上層での耕作に関する痕跡を示している可能性があるが、用途・機能についてはよくわからない。なお、土坑・ピットについては紙面の制約上、法量を別表（Tab.4～6）に記載するにとどめ詳述はしないが、次の遺構について触れておきたい。

D-6 平面形はほぼ円形、長軸約138cm、短軸約128cmを測る。深さは検出面から約63cmである。断面形は台形状あるいは漏斗状で底面は平坦である。覆土はⅦ層に類似する粗粒のAs-B混土を基質とするため、遺構の帰属年代は概ね中世に比定される。先述した他の土坑・ピットと異なり、整った掘方を伴うのが特徴的である。また、Ⅹ層～Ⅺ層（地山）の偽縫の混入が目立ち、人為的埋め戻しを伴ったと判断される。1層中から円盤が出土し、そのうち1点は被熱を受け焼けている。

P-21 平面形はやや不整の円形、長軸64cm、短軸61cmを測る。深さは検出面から21cmである。底面から直径約38cm、厚さ約10cm、重さや約40.2kgの鉄製の円盤が斜めに突き刺さった状態で出土しており、これがかなりの衝撃を伴って地盤に貫入し、周囲の土層を引きずり込むように沈下させている状況が観察される。本遺構はこの鉄製円盤が相当の高度から落すことによって形成した陥没であると判断される。鉄製円盤は、形状から恐らく第二次世界大戦時に使用された枚束焼夷弾の弾頭部と考えられるため、昭和20年8月14日から8月15日未明にかけての「伊勢崎・玉村空襲」に伴うもの可能性がある。

2. II区の概要 (Fig.15～17)

開発区域を南北に縱断する農業排水路を境に東側をII区と呼称した。現況ではII区はI区よりも地形的に一段低くなっている。I区と同様に表層地割に条里型の土地区画は認められず、調査区中央から東側の範囲には谷地田畠状の地割が重なっている。後世の開墾や現代の圃場整備による削平の影響を受け、As-Bの一次堆積層の分布がない区域も広範囲に認められた。そのため、1面目調査対象面での水田区画の存在形態は不明であったが、遺構として自然地形と思われる窪地や畦畔、溝跡、足跡列を検出した。また、上層から掘り込まれるものには中世から近世にかけての溝跡、ピット、窪地を確認した。

a. As-B直下の遺構

II区のAs-B堆積状況と旧地形 II区のAs-B堆積状況は良好ではなく、全域では確認できない。調査区西侧（概ねX=220ライン以西）は圃場整備の造成により削平され、表土除去時で既にX層が露出した状態である。調査区東側（概ねX=228ライン以東）は中世以降の耕作の影響が遺構検出面となるⅪ層に及んでいる。そのため、この範囲でのAs-Bの堆積は認められなかったため、遺構の分布状況は不詳であり、X=212・Y=67グリッドからX=215・Y=71グリッドにかけてW-31が北西～南東軸の走向で検出されるのみである。これは輕石直下の層であるⅪ層に類似する土層を覆土とするもので、じんわりと染み状に不明瞭なプランで検出された。恐らく溝跡の底面のみがごく浅く残った状態のものであろうと判断される（图11）。As-Bの一次堆積層が確認されるのは調査区中央の範囲に留まっている。この範囲は、輕石の検出されない東西の区域に比べて低く、皿状に浅く凹んでおり、そのため、後世の耕作や圃場整備に伴う地盤の平坦化の過程でも削平を免れたと考えられる。この範囲ではAs-Bも最深部で約12cmの厚さで成層しているのが観察された。こうした状況から本来II区の地形は、調査区の東端・西端から低地部へ向かって低くなつてゆく傾斜を伴っていたと想定され、低地部は旧河道の埋没によって残された自然地形であると推測される。なお、低地部から西側は、概ね平均勾配約0.8%の傾斜が復元され、東側の平均勾配は約0.4%である（图12）。この輕石の堆積が良好な範囲から1・4号窪地、37号畦、W-30、足跡列などの遺構が検出された。

1号窪地・37号畦 低地部の中央では、わずかであるが傾斜角を変えてさらに落ち込み、北西から南西へ向かう

流路状の窪地を形成している。捉えづらく恣意的であるものの傾斜変換点を辿って溝状の形態に認識したものを作成した。この窪地は、調査区北壁付近で二つに分かれているのが確認され、また、底面は緩やかな起伏をもっている。試掘Bトレンチ掘削時に本遺構の下層に砂質の水成層（II区XV・XVI層）が埋積する流路状の落込みを確認したことから、1号窪地やこれと一連の地形をなす調査区中央の低地部は、堆積河川の名残を示す自然地形と判断される。1号窪地の西側は、畔の検出は無いものの、比較的平坦な面が2段に形成されている様子が看取られる（a13）。東側は37号柱が1号窪地に沿って検出され、やや蛇行する北西-南東軸の走向を示す。また、37号柱から東側はやや勾配が緩くなり、相対的にやや平坦になっている状態が見受けられる。II区ではAs-B下に水田区画の展開を明確に捉えられなかったが、こうした平坦面や、37号柱の存在はそれを示唆するものかもしれない。1号窪地をはさんで東西に水田の展開を想定した場合、灌漑の方法は、地形的な制約に基づき北から南へ、そして窪地の西側で西から東、東側で東から西へなされる傾向があったと考えられる。1号窪地にはその余水が落とされるよう性格があったかもしれない。しかし、1号窪地に豊富な水流や滞水を示すような堆積状況では確認できず、遺構の形状からしても積極的な用水路としての性格は見出しづらいように思われる。ここでは条里地割の施工期にあっても、本遺構のような自然地形が解消されずに残された事例として捉えるにとどめておきたい。なお、今回検出した1号窪地は、その形状及び走向や地形的な特徴から、本遺跡南東に位置する南部拠点地区遺跡群No.4、2a区11号溝と同一のものと考えられる。同遺跡では、この溝の左岸で水田区画が検出されており、プラントオパール分析の結果からも稻作が行われた可能性が指摘されている（a14）。

足跡列 足跡列は1号窪地の東側の上端に沿って検出された。多数の円形の凹みが北西-南東方向に窪地や37号柱に沿うかたちで列状に集中している。形状からそのほとんどは牛馬など獣によって形成されたものと推測される。また、歩行痕という形で凹みの対応関係を読み取ることはできなかった。

4号窪地 37号柱の東側に検出され、北東から南西へ大きく彎曲しながら1号窪地へ向かう走向を示す。窪地にAs-Bの堆積が厚い点ことから、自然地形とも思われるが、形成の要因は不明である（a15）。

W-30 北東-南西軸の走向を示す。底面は北側で南から北へ低くなる傾向は認められるものの、ほぼ平坦である。浅くうっすらと皿状に凹む断面形である。1号窪地の西側に認められる段差を消して走向する。走向と地形傾斜との関係性や溝底面の勾配のつき方から、水路としての用途・機能は考えがたい。踏み分け道のような性格のものも想起されるが、性格は判断しづらい。

（註1）断ち割りによる剖面の結果、ほとんど割り込みを確認できないので、軸と走向のみを記録に残した。

（註2）西側はI区東端遺構面とII区1号窪地の西側の上端から復元。東側は、遺構面の現況のまま計算した。

（註3）I区では例えば18・20・21・34号柱のように、水上側の水田区画では畔の立ち上がりを捉えることができず、単なる段差として認証される事例があったが、ここに看取される段差も、畔野が畠平化し圧縮された末のものと捉えることが可能かもしれない。

（註4）一方で、その区域でイギリスの油酸鈉の含有量が相当的に高いことも指摘されている。

（註5）砾ち割て、例えば上層からの正面上による踏査であるのか、堆積河川など下層の地形に起因するものなのかの確認をするべきだったかもしれない。なお窪地では気泡がなかったが、等高線の走向を見る限り、本来は1号窪地から分岐していたような雰囲気もある。

b. As-B上層の遺構

溝跡 W-15～23号溝がAs-B上層から掘り込まれる溝跡である。走向に条里型地割との関連を窺わせるものは見受けられず、表層地剤に対応するものとそれ以外の2種類に分けられる。

表層地剤に対応するものにW-15があり、これに類似するものとしてW-16・18が挙げられる。W-15は圃場整備以前まで使用された用水路である。表層地剤に見る谷底状の地割の縁辺部、地形の変換点に沿うように北西から南東に向かって流下することから、付近では基幹的な用水路であったと判断される。W-16はW-15に並走し、少し東にずれて重複する。少し蛇行する様子も窺われる。W-15と同様の目的で削削されたこれに先行する用水路であると考えられ、出土遺物無く遺構の帰属年代は不詳だが、V層より下層であり、覆土が灰褐色ベースであることから、II区VI～VII層よりも後、概ね中世から近世にかけての所産であると考えられる。W-18はW-15

の6m東側に並走する。直線的な走向を示す。遺存状態は悪く、調査区内では深さは検出面から3~10cm程度と浅く、調査区を全通せず区域内中央で南半分は消失している。覆土は、粗砂~細砂質シルトで構成され、ラミナの形成も観察される事から、W-15と同程度の規模の用水路であり、これと同様の目的で開削されたものと推測される。造構の属年代は出土遺物無く不詳だが、V層に被覆され覆土が灰色砂ベースであることから、II区VI~VII層より後、概ね中世から近世に比定される。

表層地割に一致しない溝跡にはW-17・19~23がある。W-17は北東から南西へ向かう走向を示すが、蛇行し南側で二又に分岐するのが認められる。区域内南寄りで土坑状の落ち込みを伴っている。セクションの記録を残さなかつたが、堆積状況にラミナの形成など流水の痕跡が認められるため、用水路としての性格が推定される。また、W-18と重複するが、新旧関係は把握できなかつた。同時期でこれから分岐する可能性もある。出土遺物なく造構の属年代は不明だが、V層に被覆され覆土が灰色砂ベースであることから、II区VI~VII層より後、概ね中世から近世に比定される。W-19・21~23は北西から南東に向かう直線的な走向を示し、それぞれ並走する位置関係にある。W-20はこれらに対しほば直交する北東~南西軸の走向を示している。この溝渠群は、表層地割との対応関係は窺われないが、走向には類縁性が認められる。用水路としての機能が想定される一方で、耕地の区画性も示すものとして把握される。W-19は、V層に被覆され、覆土が灰色砂をベースとすることから、造構の属年代はII区VI~VII層より後、概ね中世から近世に比定される。また、ほぼ底面直上から宝篋印塔笠部の礎片が出土している(Fig.17)。法量は高さ[11.7]cm、幅[11.3]cm、材質は安山岩、調飾に扇手状の紋様が認められる。年代は不詳だが、概ね室町期の所産であると推定される。なお、W-20はW-19と同一の覆土でこれに直交する北東~南西軸の溝跡である。溝の底面は北東から南西に低くなっていることから、W-19とは同時期のものであり、これに合流するものであると判断される。W-21~23の3条は、いずれもVI~VII層をベースとする粗粒だがや泥質なAs-B混土である。W-23の底面に川砂の薄い層が観察されるほかは、ラミナの形成もなく流水の痕跡は明確ではない。覆土の特徴から、造構の年代は少なくともW-19に先行し、概ね中世に比定され、W-21~23は、概ね近い年代のものと推測される。

窪地・ピット 窪地は2・3号窪地の2基を検出した。平面形は不整形で浅く凹む程度のもので、V層に類似するシルト~細砂の堆積が認められる。人為的なものではなく、洪水などの流水によって形成された自然の微地形である可能性が想定される。ピットはP-61~66の6基を検出した。As-Bが混じる粗粒の黒褐色~暗褐色土(II区VI~VII層に類似)で概ね中世の所産であると把握される。I区と同様の状況で、不整形な掘り方で、形状や配列に規則性は窺われない。

VI 総 括

以下、雑駁なものとなるが、調査で得られた成果や観察結果をもとに、いくつかの項目に分け整理して所見を加え、まとめにかえたいと思う。

堆積環境の変化について 基本層序の観察からは、基盤層から現代に至るその生成の過程において堆積環境が大きく変遷した様子を読み取ることができる。この変遷を大まかに示すと次のようになる。基盤からAs-B直下までは粘土・粘土質シルトで粘性が強い土層の堆積が主体的であるのが特徴的である。平素は河川の氾濫などの影響は低調であるが潤澤な景観が想起される。I区・II区共にIV層以下がこれに対応する。As-B降灰後はこのスコリアをベースとした腐植した粗粒で粘性に乏しい土層(いわゆるB混土)が形成され、I区・II区共にⅤ層がAs-B一次堆積層、I区Ⅵ層及びII区Ⅶ~VI層がこれに対応し、およそ保水性の低い土壌であり台地面は高燥化したと思われる。これより上層からは、灰色砂をベースとする洪水起源の土層が堆積するようになるが、これは、中世以降に変遷したとされる利根川の氾濫によってもたらされたと考えられる。また、この層群の最上

層が現代に続く水田の基盤層となっている。I 区はVI～IV層、II 区ではV～III層がそれぞれ対応する。この様に基本層序の観察から本遺跡における堆積環境は、大仁元年の浅間山の爆裂にみる火山活動や利根川の変流を年輪として大きな変化が生じたと推測される。こうした堆積環境の変化は、その都度遺跡周辺区域における植生環境や生業にも影響を与えたと考えられ、その後の景観形成にも大きく関与したものであったとも思われる。

人為層について 本遺跡の基本層序には耕作層またはその可能性が示唆される土層が数枚観察される。I 区及びII 区 XI層は、テフラ検出分析の結果、Hr - FA 以降の形成が想定される土層で、深掘りや畦畔の断割り調査の範囲では造構の存在は不明だが、周辺遺跡との層序の比較から勘案するに古墳時代後期の水田層に対応する可能性がある。I 区及びII 区 X層は、砂交じりで流水の影響が看取されるが、搅拌を受けたような印象も受け、必ずしも自然層とは断定しえなかった。I 区及びII 区 IX層は As - B 下水田跡の作土である。I 区 VII層、II 区 VI・VII 層は As - B 降灰後、耕地の復旧の過程で搅拌され形成された耕作層であると推定される。I 区 VI層、II 区 III～IV層は灰色砂を基質とするため、洪水堆積物を起源とすると思われるが、相対的に腐植質であり、As - B を均質に含むことから搅拌を受けていると考えられ、それが中世～近世にかけてある時期の耕作層である可能性がある。鍬床や酸化鉄の集積層が観察されない点から畠に伴うもの可能性もある。

As - B 下水田跡の区画性 I 区で検出した水田跡に条里型地割に基づく水田区画を確認し、今回の調査区域に 5 坪ほど展開する状況が復元された。本遺跡周辺は表層地割に条里型の耕地区画が認められない区域であるが、下層に埋没条里造構の展開が明らかになったことは今回の調査の主要な成果一つといえる。坪界と判断されるものに 5・10・25・26 号畦および W 29 の 5 条が挙げられる。それぞれの畦畔・溝跡の周辺遺跡との対応関係は、現状、26号畦が本遺跡と同時期に調査された南部拠点地区遺跡群 No.8 で検出したものに認められるのみである。25号畦の北側の延長は、北関東自動車道建設に伴って調査された横手油田遺跡 H～I 区付近を通過すると推定されるが、ここでは造構の残存状態が不良なため畦畔の検出は確認されていない。II 区については水田造構の展開を想定しうるが、広範囲に削平を受け、軽石直下の造構面は区域内の中央付近でしか残存していないため、水田区画の復元は難しく全容の把握には至らず不詳である。しかし、表層地割からも推察されるように区域内は谷地状に浅く窪む地形を成していることから、他に見られるような坪割内を矩形に区画する指向性は持たず、むしろ、地形に対応した谷地凹状の耕地区画であった可能性も想定される（註1）。

条里型地割の継続性について 本遺跡周辺では表層地割に条里型の十地区画が認められず、As - B 降灰以降、昭和期に至るまでの間に土地区画に変更があったことが明白である。この変更の履歴については、調査区域内で As - B 上層に検出した溝跡の調査区壁における掘り込み面の観察から大雑把であるが推測することができる。観察の結果、本遺跡における As - B 上層の溝跡は、条里坪線ラインを踏襲するものと、表層地割に一致するものの概ね 2 つに人別できる。軽石下に条里型地割の展開を確認した I 区では、区画②と区画③の境界での事例に見るように、V 層より下層に条里坪線と対応する溝型の存在が認められ、一方で表層地割に対応する溝渠は造構面に達しないものも含めて全て IV 層を掘り込むもので、IV 层以下に確認できるものが少ない点が指摘される。この事から、本遺跡 I 区においては、少なくとも V 層よりも前までは条里型地割が継承され、V～IV 層の形成を挟んで表層地割と同様の耕地形態に区画が変更された可能性が示唆される。無論、平面的に把握されたものではなく、一部の断面観察によるものであり検証の余地を残すものの、掘り込み面の検討から景観変遷を掴むことができる可能性がある事例として挙げておきたい。なお、II 区では W - 21～23 のように相対的に As - B 降下年代に近いものであっても既に条里と無関係な走向を示すものの存在が認められるが（註2）、谷地状という地形的な特徴も踏まえたうえで、地割の形成には I 区とは異なる経過があつた可能性を考える必要があると思われる。いずれにせよ、大枠での遺跡周辺における十地区画の変更は、利根川の変流と氾濫が災禍となっている様子を窺い知ることができ、これについては、周辺遺跡の報告書の中でしばしば触れされることもある。ともあれ、こうした堆積環境の変化が地域の景観変遷に関与した事例として把握される。また、水田区画の変容は、從前からの用水系

統に対しても一定の変更を迫るものであったであろうことも指摘しておきたい。

As-B下水田跡の検出状況 軽石下に検出される畦畔は、全体的に高まりが捉えづらく扁平で、良好なものでも凹面との比高差は4~5cm程度である。一枚の水田区画に一定の水深で湛水せざるには若干高さを欠くように思われる。また途中で途切れで区画を構成しないものもある。こうした畦畔の状態の悪さは、As-B附近時に耕作が停止されているような状況を示しているのかもしれない。現在でも耕作がしばらくなされていない水出の畦畔は往々にして扁平でなだらかであるから、当時の耕作状況が畦畔の遺存状態に反映される可能性は否定し得ない。しかし、この畦畔の扁平化は從来しばしば指摘されることもあるように上層からの土圧の影響も大きいと考えられる。現代の水田において作土が10cm~20cm程度で設けられるのに対し、軽石下水田跡の作土層の厚さは6cm~8cm程度と薄い。水田層そのものの圧縮を想定する必要もあるであろう。

田面の状態について I区a(特にX=198グリッドライン以西の区域)では26号畦を挟んだ北側と南側の水田区画の田面の状態には顕著な違いが見られた(PL.4の6)。北側は非常に平坦な田面であるのに対し、南側の田面は著しく凹凸が認められるものであった。この状態は有山氏が南部拠点地区遺跡群No.1・5・6において田面の状態に基づく分類を提示しており、その中の「なだらかな水田面」及び「凹凸のある水田面」の状態に対応するものと思われる。こうした田面の状態の差異は溢水や流水、または耕起・耕耘など何かしらの農事に関連してもたらされたものと想えることができるが、現状ではその成因は定まらず検討の余地を残している(註3)。

遺跡周辺の古代における灌漑系統について 5・25号畦に伴う小溝やW-29は坪割内への給水を行うための導水路と考えられ、北西から南東方向へ傾斜する地形的な制約から、用水は北から南へ、西から東へ流されたと考えられる。また、この導水路は、西田遺跡3・11・12号溝や南部拠点地区遺跡群No.1の8c号溝のような基幹的な用水路から引かれる形態をとると思われ、分水点の位置は概ね遺跡の北西方向に絞られる。本遺跡の約250m北側では、東西1.4kmにわたって前橋台地を東西に横断するかたちで横手南川端遺跡・横手油田遺跡の調査が行われているが、この区域にこのような同時期の用水堀と見なせる遺構の検出は認められない。「基幹的な用水路」は更に北そして西に推定されるであろう。また、この場合、本遺跡の水田が必ずしも端氣川からの引水に限定されない可能性は留意しておきたい。遺跡周辺(特に本遺跡以西)に現行の端気川流路からの引水を想定した場合、分岐される用水堀の走向は地形的な制約を受けて、上流部では北東-南西軸、つまり条里坪線に対して斜行する走向をとらざるを得ない(註4)。用水堀の走向が条里の規制を受けると仮定した場合は、この様な流路の設定は難しいと思われる。むしろ北西のより標高の高い区域に水源が求められるのであれば、そこからの用水の分配を行う方式を探った方が容易いようと思える。現在、遺跡が立地する前橋台地端気川右岸の六供町・天川町以北は、市街化が進み旧状を留めていない。しかし、この区域の発掘調査でAs-B下水田跡の検出が認められる遺跡も点在し、古代においても相応に水田地帯が展開した状況が想起される。また、文京町No.1遺跡での坪界畦畔の検出、南町の市之坪に見る地名、街道の走向から条里型地割の施工があった様子も窺われる。実態は不詳ながら古代においてこの区域の灌漑を前提とした川水系統の成立があったことは想像に難くない(註5)。また仮にそこでの用水量が豊富であった場合は、地形的には水下にあたる本遺跡周辺区域とも相關するかたちでの灌漑体系を成していた可能性も想起されるところであり、勿論、憶測の域を出るものではないが、一考の余地があると思われる。

(註1) 1号施設が示す埋没谷の走向に概ねW-31号37号跡が並走することから示唆される。また、横手油田遺跡D区は本遺跡II区同様の谷地状の地形に水田灌漑の痕跡があるが、ここでも区画の「乱れ」が看取られる。

(註2) I区W-1・4と同時期である。これらは条里坪線に沿っている。

(註3) 有山氏の田面の検出状況による分類は、その内の状況から「耕作田」・「休耕田」の識別を行うことを目的とした試みの一環である。氏は田面の半倒化は耕作されないとより凹面が風化することで生じると提えている。しかし、積水や流水によってなだらかになる可能性は無いだろうか。また、収穫後そのまま起せず放置される、耕耘したが耕作を行わずに放棄されるなど、休耕または耕作放棄地に至るまでには複数の経路が想定されるところであり、過程によっては田面の示す堆集部にも差異が生じるかもしれない。また前述したとおり、我々が観察に及ぶ段階では水田面が空疎により変形している場合もあるであろう。田面に残る内凹は、何かしらの人為的な痕跡であると思われるため、照察・検討の対象とすべきと思われるが、一方で、現状、ここから耕作の利用形態を解明するには難しいよう

思える。

(注4) 横気川から分水される郡島用水にその特徴が顕著である。標高約95m～92m付近を等高線と並走するように北東から南西に向かって流下している。ちなみにこの郡島用水が横気川右岸における横気川用水系の灌漑区域の北限となっている。

(註5) 水脈として鷲呂川水系、女満浦流域、他名山系の中規模の山岳河川など。

参考文献

- 新井 仁 2002 『西田道跡・村中道跡』 鶴崎馬場埋蔵文化財調査事業団
 有山怪曾 2010 『南部拠点地区遺跡群No.5』 南相馬市教育委員会
 櫻井和也 2013 『上佐島中原前田遺跡』 南相馬市教育委員会・上佐島工業株式会社
 高井佳弘 2006 『平安時代後期水路耕作の位置探査－群馬県内虎頭B脇石ド水田の検討から－』『生糸の考古学』 同成社
 中里正まさ 2006 『勝野遺跡における大町跡の検査例』『群馬考古学手帳 10』 前馬十景観会
 春山秀幸 2002 『勝野「赤川城道跡」構造・地質調査』 鶴崎馬場埋蔵文化財調査事業団
 広施用歴史編さん委員会 1994 『赤城用水史』
 鹿島原史編さん委員会 1985 『群馬県史』 資料編4 群馬県

Tab.2 畦畔計測表

遺構名	区名	グリッド	主軸方位	長さ(m)	幅(cm)	高さ(cm)	備考
1号畦	I区 b	X=190・Y=90	N 44° -E	9.66	56~88	1~3	北縁に小溝状の凹みが部分的に認められる。
2号畦	I区 b	X=190・Y=90	N 52° -E	1.72	48~96	0~2	
3号畦	I区 b	X=190・Y=94	N 70° -E	1.94	66~80	0~4	
4号畦(横)	I区 b	X=191・Y=97	N 65° -E	1.84	76	0~4	
4号畦(底)	I区 b	X=191・Y=97	N 3° -W	10.88	72~88	0~3	水口Dを作ら。
5号畦	I区 d	X=197・Y=128	N 82° -E	1.52	194~200	2~3	坪界範囲、2条1対で並走。畦間が水路。
5号畦	I区 g	X=218・Y=128	N 77° -W	5.88	160~228	0~3	坪界範囲、2条1対で並走。畦間が水路。
6号畦	I区 d	X=197・Y=121	N 1° -W	11.76	122~124	0~2	坪起削めて微弱。誤認の可能性有。
7号畦	I区 b	X=207・Y=87	N 91° -E	5.46	54~88	0~3	
8号畦	I区 b	X=209・Y=91	N 76° -E	5.64	64~92	1~3	
9号畦	I区 h	X=209・Y=93	N 76° E	[4.72]	72~96	0~3	
10号畦(横)	I区 f	X=213・Y=107	N 76° -E	6.00	68~104	0~4	
10号畦(横)	I区 f	X=213a・Y=107	N 3° -E	[21.44]	74~90	0~2	坪界範囲。
11号畦	I区 f	X=214・Y=168	N 53° -E	5.36	58~104	0~3	
12号畦	I区 f	X=214・Y=110	N 52° -E	5.40	54~100	0~3	
13号畦	I区 f	X=214・Y=111	N 55° E	5.82	64~95	0~4	
14号畦	I区 g	X=214・Y=114	N 88° -E	5.92	60~92	0~3	北縁に小溝状の凹みが部分的に認められる。
15号畦	I区 g	X=215・Y=115	N 42° -E	7.04	44~80	1~3	段差状。
16号畦	I区 g	X=215・Y=117	N 43° -E	6.96	48~84	0~2	
17号畦	I区 g	X=215・Y=118	N 43° -E	7.08	56~176	0~2	
18号畦	I区 g	X=216・Y=122	N 54° -E	6.55	76~104	1~2	段差状。
19号畦	I区 g	X=217・Y=125	N 84° -E	5.84	60~80	0~1	
20号畦	I区 g	X=219・Y=129	N 3° W	10.64	56~80	0~3	段差状。
21号畦	I区 g	X=218・Y=129	N 3° -E	11.16	58~74	0~3	段差状。
22号畦(横)	I区 a	X=190・Y=86	N 85° -E	[8.16]	60~74	0~3	
22号畦(横)	I区 a	X=190・Y=86	N 13° -W	[2.64]	50~60	0~1	
23号畦	I区 a	X=205・Y=77	N 74° -E	[9.76]	48~120	0~2	
24号畦	-	-	-	-	-	-	欠番。
25号畦	I区 a	X=186・Y=75	N 3° -W	15.68	200~232	1~4	坪界範囲、2条1対で並走。畦間が水路。南脇に小溝が部分的に認められる。
26号畦	I区 a	X=195・Y=73	N 93° -E	82.42	48~132	0~5	坪界範囲。
27号畦	I区 a	X=188・Y=73	N 1° -E	2.60	60~89	2	水口A・Bを作ら。
28号畦	I区 a	X=187・Y=75	N 68° -E	18.72	52~104	0~3	水口Cを作ら。
29号畦	I区 a	X=191・Y=73	N 3° -E	5.28	50~80	1~3	水口Cを作ら。
30号畦	I区 a	X=191・Y=75	N 5° -W	[8.40]	56~88	0~3	水口Dを作ら。
31号畦	I区 a	X=194・Y=74	N 1° E	[6.32]	52~76	0~3	水口Dを作ら。
32号畦	I区 a	X=196・Y=72	N 10° -W	8.72	40~72	0~4	水口Eを作ら。
33号畦	I区 a	X=197・Y=72	N 2° -W	12.16	36~88	0~4	
34号畦	I区 a	X=202・Y=71	N 1° -W	[12.40]	68~104	1~4	段差状。
35号畦(横)	I区 b	X=209・Y=96	N 88° -E	[6.88]	48~96	2~5	
36号畦(横)	I区 b	X=209・Y=96	N 9° -W	3.88	48~72	1~3	
37号畦	I区 f	X=217・Y=121	N 32° -E	[5.48]	56~76	0~2	
37号畦	II区	X=226・Y=66	N 32° W	16.28	72~116	0~4	
38号畦	I区 b	X=216・Y=97	N 86° -E	6.48	192~248	0~2	坪起削めて微弱。誤認の可能性有。
39号畦(横)	I区 a	X=203・Y=84	N 92° -E	[224]	56	0~2	
39号畦(横)	I区 a	X=203・Y=84	N 2° -E	[200]	77~88	0~2	

Tab. 3 溝跡計測表

遺構名	区名	グリッド	主軸方位	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	底面の傾斜方向	年代	備考
W-1	I区b(西)	X=191・Y=100	N=76°・E	1.80	68~80	4~17	西→東	中世	条里坪界に重なる。
	I区b(中央)	X=201・Y=100	N=92°・W	11.52	52~68	1~8	西→東		
	I区c	X=211・Y=100	N=83°・E	6.16	86~132	11~19	西→東		
W-2	I区d	X=198・Y=120	N=56°・W	2.96	34~56	2~5	北西→南東	古代	
W-3	I区b	X=193・Y=104	N=56°・W	2.60	28~36	0~4	北西→南東	古代	
W-4	I区b(西)	X=191・Y=100	N=67°・E	1.84	68~120	3~8	西→東	中世	条里坪界に重なる。
	I区b(中央)	X=201・Y=100	N=98°・E	10.84	54~88	4~14	西→東		
W-5	I区e	X=211・Y=100	N=87°・E	6.32	26~69	1~5	西→東	中世	条里坪界に重なる。
	I区b(西)	X=191・Y=101	N=92°・E	2.40	28~49	2~4	西→東		
	I区b(中央)	X=201・Y=101	N=91°・E	15.04	24~44	3~11	西→東		
W-6	I区e	X=211・Y=101	N=86°・E	6.32	42~96	13~23	西→東	中世	条里坪界に重なる。
	I区b	X=191・Y=102	N=58°・E	2.68	79~132	2~5	南西→北東		
W-7	I区b(中央)	X=204・Y=100	N=94°・E	[10.04]	28~52	0~5	西→東	中世	条里坪界に重なる。
	I区e	X=211・Y=100	N=86°・E	[1.72]	24~40	3~6	西→東		
W-8	I区b	X=210・Y=92	N=9°・W	4.16	52~80	0~4	北→南	古代	
W-9	I区b	X=210・Y=92	N=12°・W	5.32	48~72	1~6	北→南	古代	
W-10	I区g	X=216・Y=125	N=2°・E	20.00	48~64	3~11	北→南	近~現代	圍堰整備以前の地割に對応。
W-11	I区a	X=188・Y=73	N=9°・W	[4.64]	48~60	1~3	半壌	中~近世	
W-12	I区a	X=205・Y=69	N=30°・W	[5.96]	15~28	0~2	北西→南東	近~現代	圍堰整備以前の地割に對応。
W-13	I区a	X=205・Y=69	N=33°・W	[6.60]	20~40	1~3	北西→南東	中~近世	W-12に並走。
W-14	I区a	X=205・Y=69	N=31°・W	[6.24]	34~68	0~4	北西→南東	中~近世	W-13に並走。
W-15	II区	X=218・Y=69	N=39°・W	17.84	176~208	22~43	北西→南東	近~現代	圍堰整備以前の地割に對応。
W-16	II区	X=218・Y=69	N=33°・W	[17.04]	150~208	5~24	北西→南東	中~近世	W-15と重複、並走。
W-17	II区	X=220・Y=69	N=14°・W	[12.48]	36~144	2~9	北西→南東	中~近世	
W-18	II区	X=220・Y=67	N=43°・W	[8.24]	150~248	3~10	北西→南東	中~近世	
W-19	II区	X=227・Y=67	N=42°・W	18.40	34~60	3~10	北西→南東	中~近世	全面印模捺部の痕跡が出土。
W-20	II区	X=230・Y=65	N=53°・E	25.12	14~32	1~6	北東→南西	中~近世	
W-21	II区	X=230・Y=65	N=41°・W	17.76	68~112	2~15	北西→南東	中世	
W-22	II区	X=230・Y=65	N=45°・W	18.72	48~96	3~15	北西→南東	中世	
W-23	II区	X=233・Y=64	N=41°・W	4.32	89~198	11~25	北西→南東	中世	
W-24	I区a	X=209・Y=72	N=11°・E	[12.28]	40~62	0~7	北→南	古代	
W-25	I区a	X=190・Y=75	N=88°・E	[6.88]	22~26	0~2	西→東	中~近世	
W-26	I区b	X=210・Y=97	N=86°・E	5.56	40~78	1~4	ほぼ平坦	古代	
W-27a	I区b	X=209・Y=89	N=80°・E	[5.60]	20~44	0~7	ほぼ平坦		
W-27b	I区b	X=209・Y=89	N=81°・E	[2.72]	25~36	0~2	ほぼ平坦	近~現代	圍堰整備以前の地割に對応。
W-27c	I区b	X=209・Y=89	N=82°・E	[5.60]	28~56	0~4	ほぼ平坦		
W-28	I区d	X=121・Y=97	N=87°・W	2.04	122~124	2~6	西→東	中~近世	
W-29	I区e	X=212・Y=100	N=87°・E	[3.92]	25~36	0~3	西→東	古代	条里界。
W-30	II区	X=223・Y=67	N=12°・E	[14.40]	28~60	0~2	ほぼ平坦	古代	
W-31	II区	X=213・Y=69	N=40°・W	18.20	20~38	0	北西→南東か	古代	底面を痕跡的に検出した。

Tab. 4 窟地計測表

遺構名	区名	グリッド	主軸方位	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	年代	備考
1号窓地	II区	X=223・Y=66	N=24°・W	15.72m	140~282	9~12	古代	A5-B一次堆積層。
2号窓地	II区	X=222・Y=68	N=51°・E	620	143	14	中~近世	
3号窓地	II区	X=223・Y=67	N=36°・E	354	134	8	中~近世	
4号窓地	II区	X=228・Y=67	N=42°・E	[16.64]m	136~284	6~9	古代	A5-B一次堆積層。大きく湧出した走向。

Tab. 5 土坑計測表

遺構名	区名	グリッド	主軸方位	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	年代	備考
D-1	I区b	X=190・Y=95	N=83°・W	69	38	6	中世	B層土。
D-2	I区d	X=196・Y=118	N=87°・W	85	46	9	中世	B層土。
D-3	I区b	X=194・Y=108	N=96°・W	72	52	18	近~現代	A層土。
D-4	I区f	X=212・Y=102	N=54°・W	81	77	12	中世	B層土。
D-5	I区f	X=213・Y=107	N=14°・W	52	[33]	29	中世	B層土。
D-6	I区a	X=204・Y=76	N=68°・W	138	128	68	中世	B層土。
D-7	I区a	X=207・Y=72	N=0°・W	120	84	5	中世	B層土。
D-8	I区a	X=195・Y=72	N=90°・W	141	128	16	中世	B層土。

Tab. 6 ピット計測表

記号名	区名	グリッド	主輪方位	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	年代	備考
P-1	I区,d	X=196・Y=18	N-74°・W	31	24	5	中世	B罫土。
P-2	I区,b	X=194・Y=109	N-72°・W	39	38	12	中世	B罫土。
P-3	I区,b	X=194・Y=107	N-4°・E	42	26	10	中世	B罫土。
P-4	I区,b	X=191・Y=108	N-82°・W	62	43	8	中世	B罫土。
P-5	I区,b	X=204・Y=100	N-97°・E	56	34	9	中世	B罫土。
P-6	I区,b	X=209・Y=87	N-68°・E	69	29	13	中世	B罫土。
P-7	I区,b	X=208・Y=88	N-76°・E	38	22	7	中世	B罫土。
P-8	I区,b	X=209・Y=89	N-36°・E	68	24	14	中世	B罫土。
P-9	I区,b	X=209・Y=93	N-95°・E	65	33	19	中世	B罫土。
P-10	I区,b	X=209・Y=94	N-13°・W	51	49	10	中世	B罫土。
P-11	I区,b	X=211・Y=94	N-41°・E	57	45	12	中世	B罫土。
P-12a	I区,c	X=212・Y=100	N-33°・E	80	40	8	中世	B罫土。
P-12b	I区,e	X=212・Y=100	N-56°・W	47	45	25	中世	B罫土。
P-13	I区,e	X=213・Y=104	N-1°・W	48	34	13	中世	B罫土。
P-14	I区,f	X=212・Y=107	N-63°・W	36	32	4	中世	B罫土。
P-15	I区,g	X=215・Y=114	N-55°・E	32	20	16	中世	B罫土。
P-16	I区,g	X=215・Y=119	N-89°・E	49	34	8	中世	B罫土。
P-17	I区,n	X=189・Y=86	—	26	18	9	中世	B罫土。
P-18	I区,a	X=197・Y=85	N-43°・W	28	28	10	中世	B罫土。
P-19	I区,a	X=204・Y=83	N-4°・W	51	38	10	中世	B罫土。
P-20	I区,a	X=204・Y=83	N-62°・E	60	46	14	中世	B罫土。
P-21	I区,a	X=208・Y=82	N-68°・E	64	51	21	現代	昭和期、地下水痕。
P-22	I区,a	X=208・Y=82	N-26°・W	50	37	9	中世	B罫土。
P-23	I区,a	X=205・Y=79	N-42°・W	70	47	13	中世	B罫土。
P-24a	I区,u	X=206・Y=79	N-48°・W	29	26	12	中世	B罫土。
P-24b	I区,a	X=206・Y=79	N-69°・W	48	32	9	中世	B罫土。
P-25	I区,a	X=205・Y=78	N-55°・E	50	29	8	中世	B罫土。
P-26	I区,a	X=205・Y=77	N-15°・E	41	34	9	中世	B罫土。
P-27	I区,n	X=205・Y=77	N-35°・E	31	30	22	中世	B罫土。
P-28	I区,a	X=205・Y=77	N-32°・E	31	28	19	中世	B罫土。
P-29	I区,a	X=205・Y=76	N-24°・E	35	29	9	中世	B罫土。
P-30	I区,a	X=205・Y=74	N-89°・W	59	44	13	中世	B罫土。
P-31	I区,a	X=195・Y=72	N-7°・E	47	42	8	中世	B罫土。
P-32	I区,a	X=195・Y=72	N-99°・E	42	30	6	中世	B罫土。
P-33	I区,n	X=195・Y=72	N-10°・E	42	35	11	中世	B罫土。
P-34	I区,n	X=195・Y=72	N-55°・W	36	33	9	中世	B罫土。
P-35	I区,a	X=195・Y=72	N-29°・E	38	34	7	中世	B罫土。
P-36	I区,a	X=195・Y=72	N-77°・W	47	35	8	中世	B罫土。
P-37	I区,a	X=195・Y=72	N-31°・E	45	20	8	中世	B罫土。
P-38	I区,a	X=195・Y=73	N-34°・W	46	21	10	中世	B罫土。
P-39	I区,n	X=195・Y=73	N-38°・W	57	42	5	中世	B罫土。
P-40	I区,a	X=195・Y=73	N-52°・W	75	47	20	中世	B罫土。
P-41	I区,a	X=197・Y=74	N-70°・W	77	56	15	中世	B罫土。
P-42	I区,a	X=197・Y=74	N-23°・E	66	49	17	中世	B罫土。
P-43	I区,a	X=200・Y=73	N-1°・W	36	35	6	中世	B罫土。
P-44	I区,a	X=201・Y=73	N-72°・E	37	26	10	中世	B罫土。
P-45	I区,a	X=201・Y=73	N-60°・W	37	33	6	中世	B罫土。
P-46	I区,a	X=203・Y=72	N-54°・E	55	27	8	中世	B罫土。
P-47	I区,a	X=204・Y=71	N-47°・W	62	56	21	中世	B罫土。
P-48	I区,a	X=204・Y=70	N-32°・W	61	56	13	中世	B罫土。
P-49	I区,a	X=204・Y=70	N-72°・W	41	35	8	中世	B罫土。
P-50	I区,a	X=205・Y=70	N-82°・E	34	29	6	中世	B罫土。
P-51	I区,a	X=206・Y=70	N-33°・W	38	22	15	中世	B罫土。
P-52	I区,a	X=206・Y=70	N-9°・W	57	46	6	中世	B罫土。
P-53	I区,a	X=206・Y=70	N-36°・E	44	31	5	中世	B罫土。
P-54	I区,a	X=206・Y=70	N-55°・E	106	70	16	中世	B罫土。
P-55	I区,a	X=207・Y=69	N-87°・W	41	29	8	中世	B罫土。
P-56	I区,a	X=207・Y=71	N-57°・W	56	55	17	中世	B罫土。
P-57	I区,a	X=208・Y=71	N-97°・W	34	30	5	中世	B罫土。
P-58	I区,a	X=207・Y=72	N-64°・E	56	33	8	中世	B罫土。
P-59	I区,a	X=208・Y=72	N-61°・E	59	27	6	中世	B罫土。
P-60	I区,a	X=208・Y=72	N-43°・E	98	35	11	中世	B罫土。
P-61	I区,a	X=218・Y=57	N-61°・W	54	26	8	中世	B罫土。
P-62	I区,a	X=223・Y=59	N-12°・W	41	38	10	中世	B罫土。
P-63	I区,a	X=228・Y=56	N-39°・W	61	48	22	中世	B罫土。
P-64	I区,a	X=229・Y=67	N-59°・E	46	35	11	中世	B罫土。
P-65	I区,a	X=230・Y=67	N-92°・E	77	45	16	中世	B罫土。
P-66	I区,a	X=232・Y=65	N-89°・W	42	40	18	中世	B罫土。

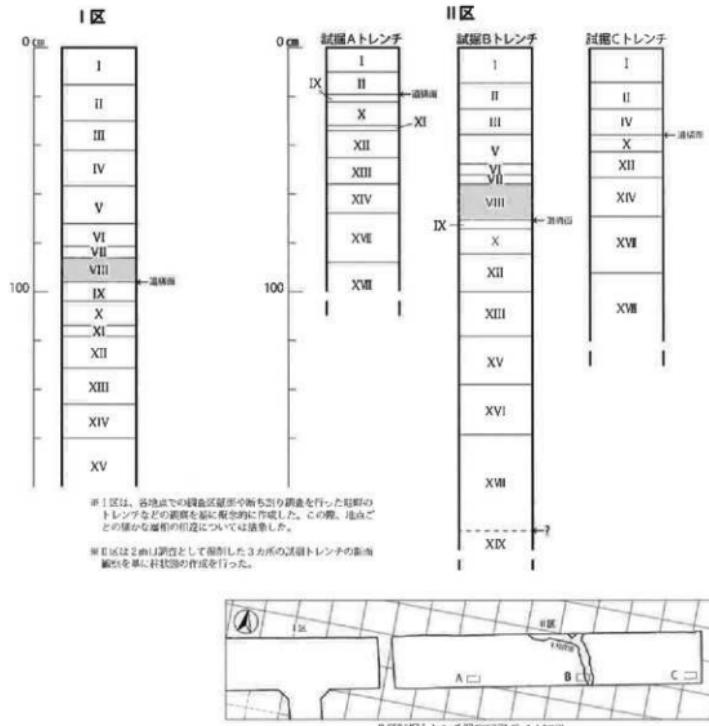


Fig.3 南部抛点地区遗存群No.7基本层序

右側：海潮地點地盤に過剰荷重と基礎の表面地盤（左が北、4万分の1）
測量地図では、実測地図以上である海潮地盤を空堀地盤が表現され、これは付帯的
地盤が存在する右側の地盤に、右側の地盤では手前手後、南側、西側の附近に
高さや水位がそのまま現れていたもの。生垣手前地盤はやや低い位置ではない。
現在では生垣は一部の場所でその影響が残されているものの、生垣の位置には現れて
いない。

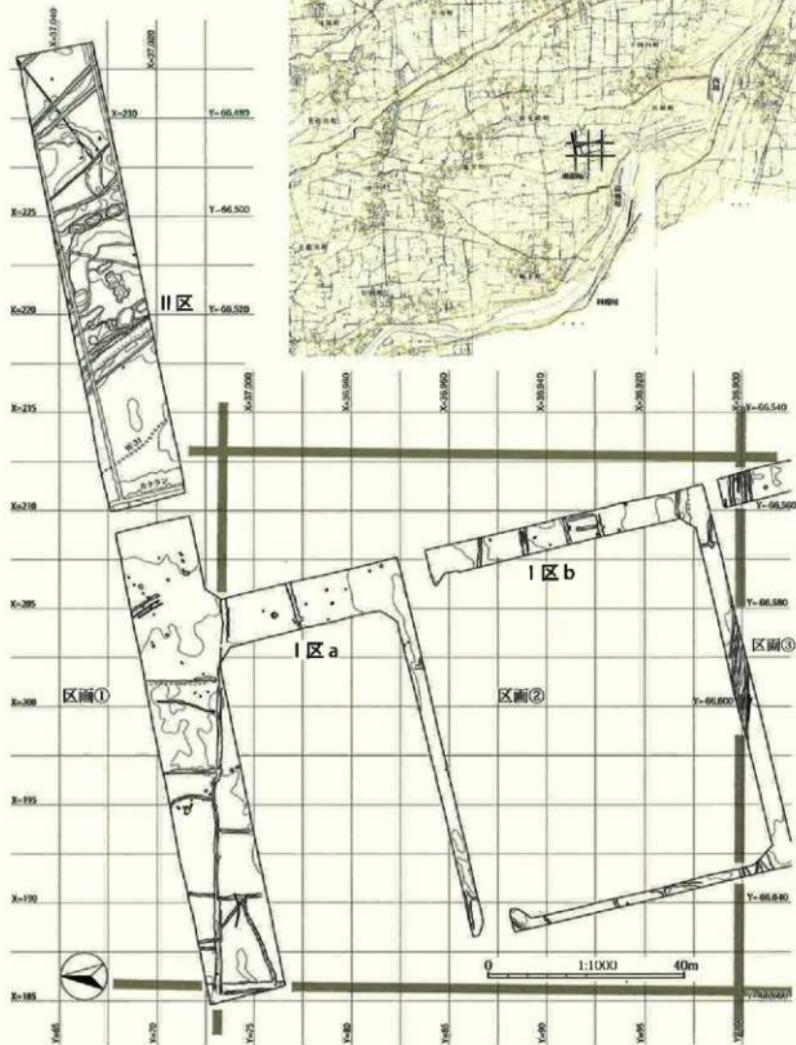


Fig.4 南部抛点地区遗物群No.7全体图(1)

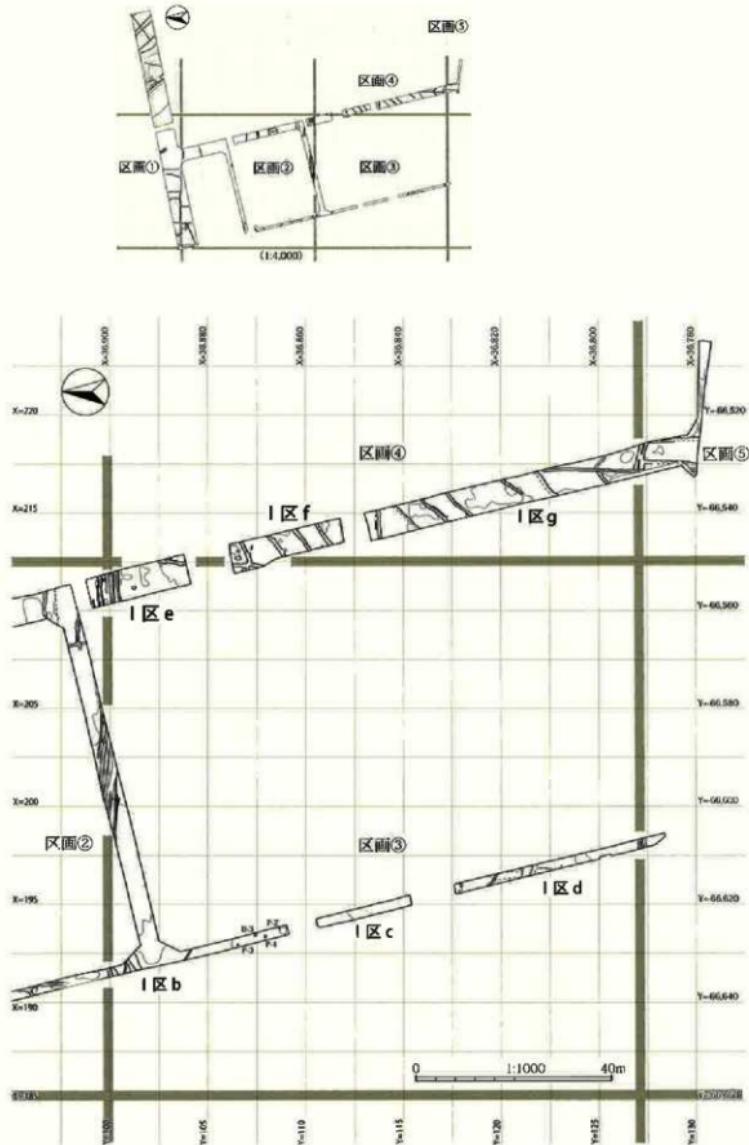


Fig.5 南部測点地区遺跡群No.7全体図(2)

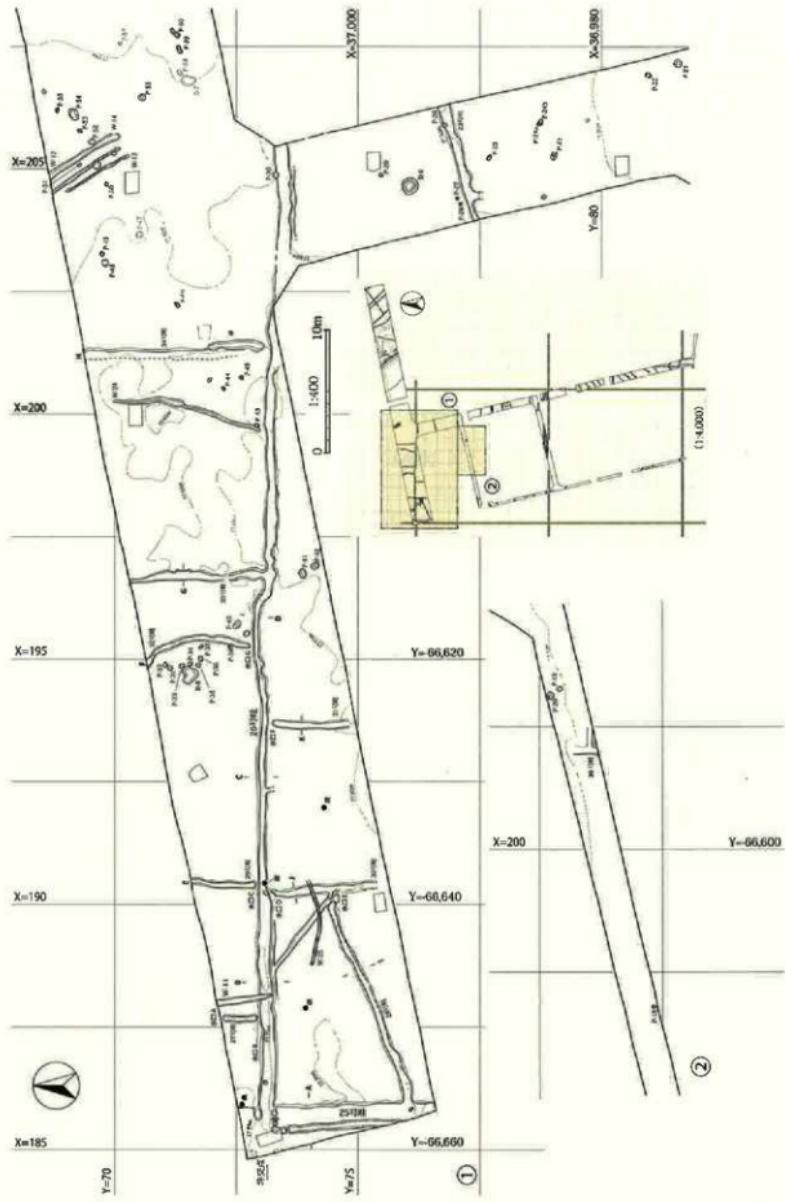


Fig.6 1区 As-B下水田跡(1)

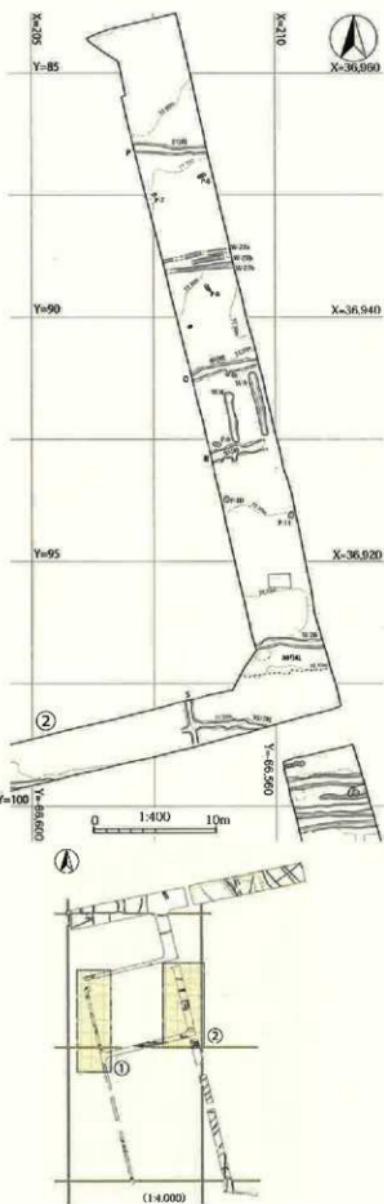
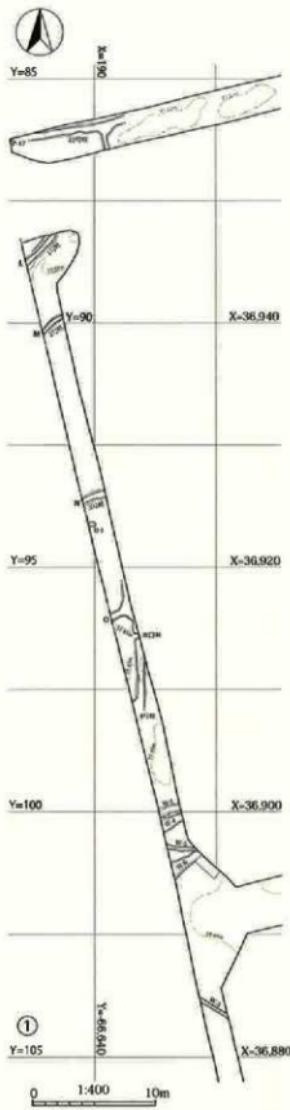


Fig.7 I 区 As - B 下水田跡(2)

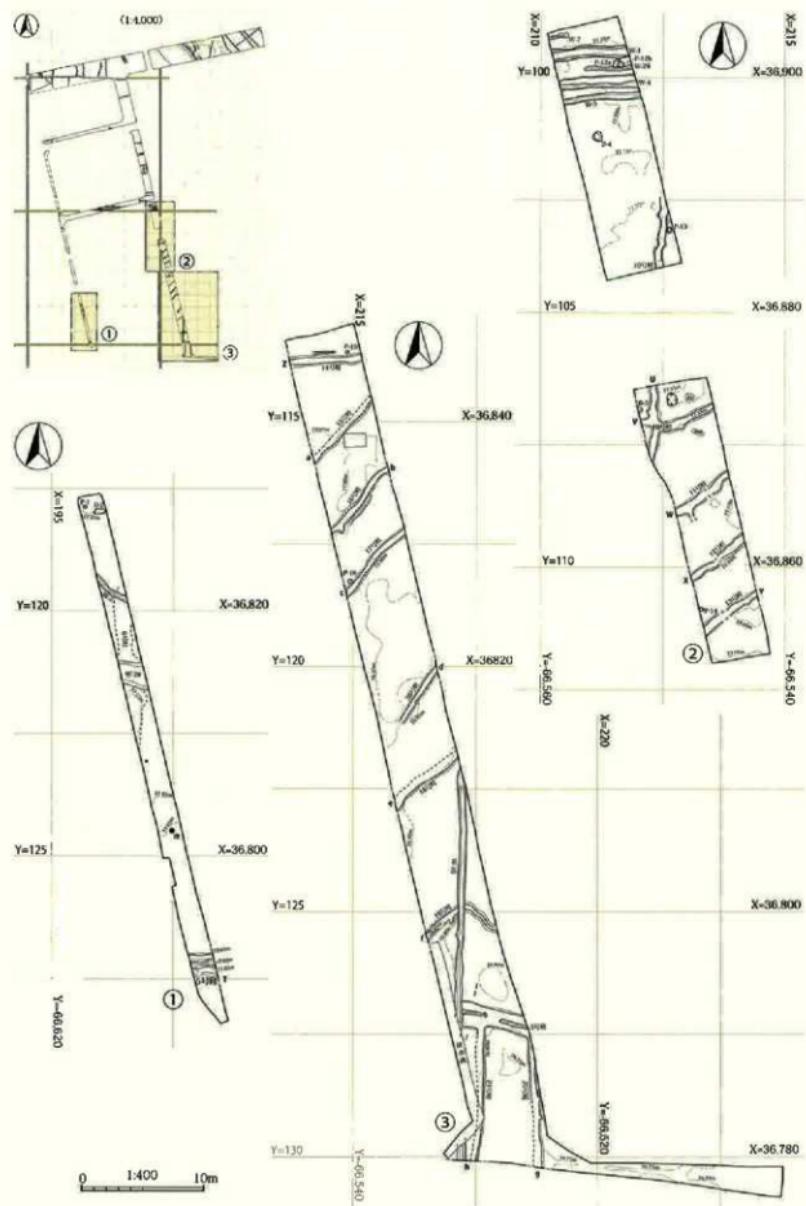


Fig.8 I区As-B下水田跡(3)

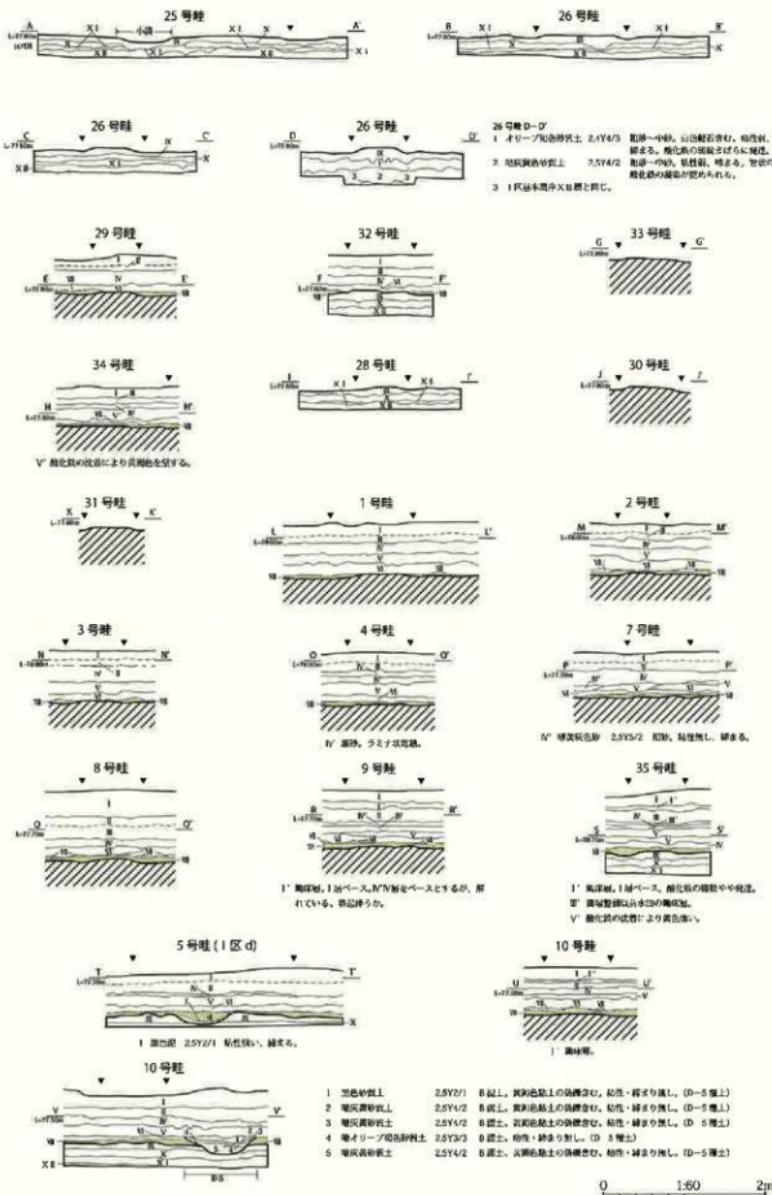


Fig.9 I区畦畔土層断面図(1)

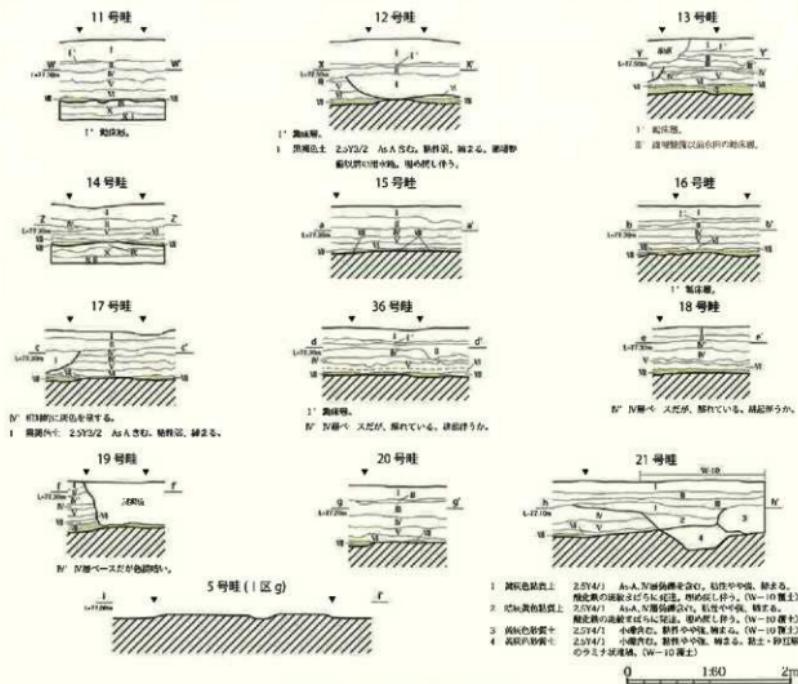


Fig.10 J区畔壁土層断面図(2)

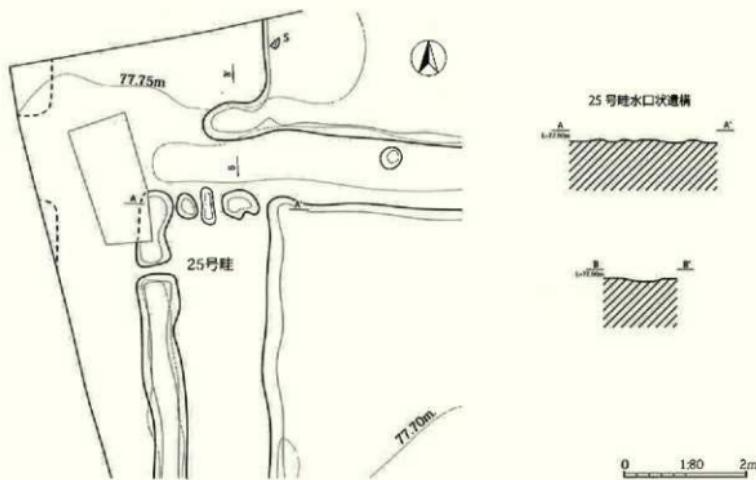
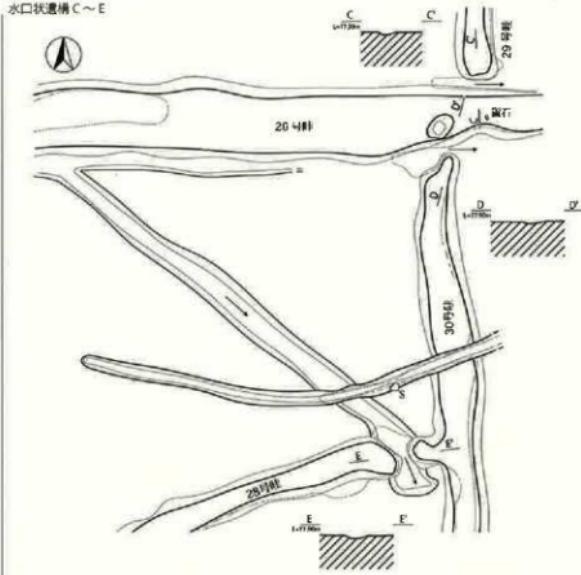


Fig.11 I区水口状遺構(1)

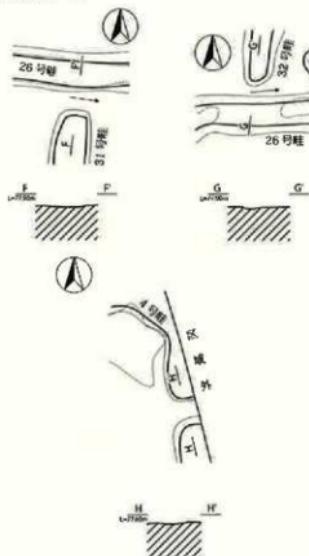
水口状构造 A ~ B



水口状构造 C ~ E



水口状构造 F ~ H



W-2



W-3



0 1:80 2m

Fig.12 I 区水口状构造(2)、W-2・3

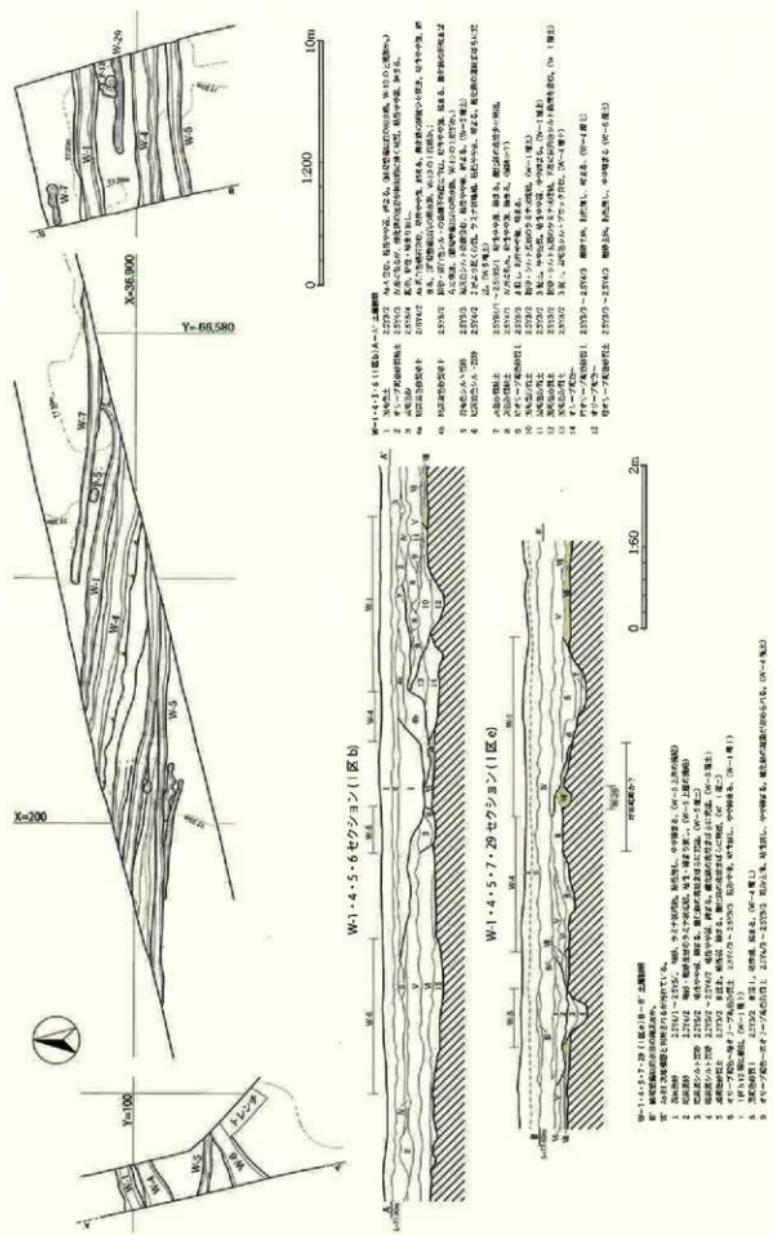


Fig.13 条里坪境で並走する溝渠群 (W-1・4・5・6・7・29)

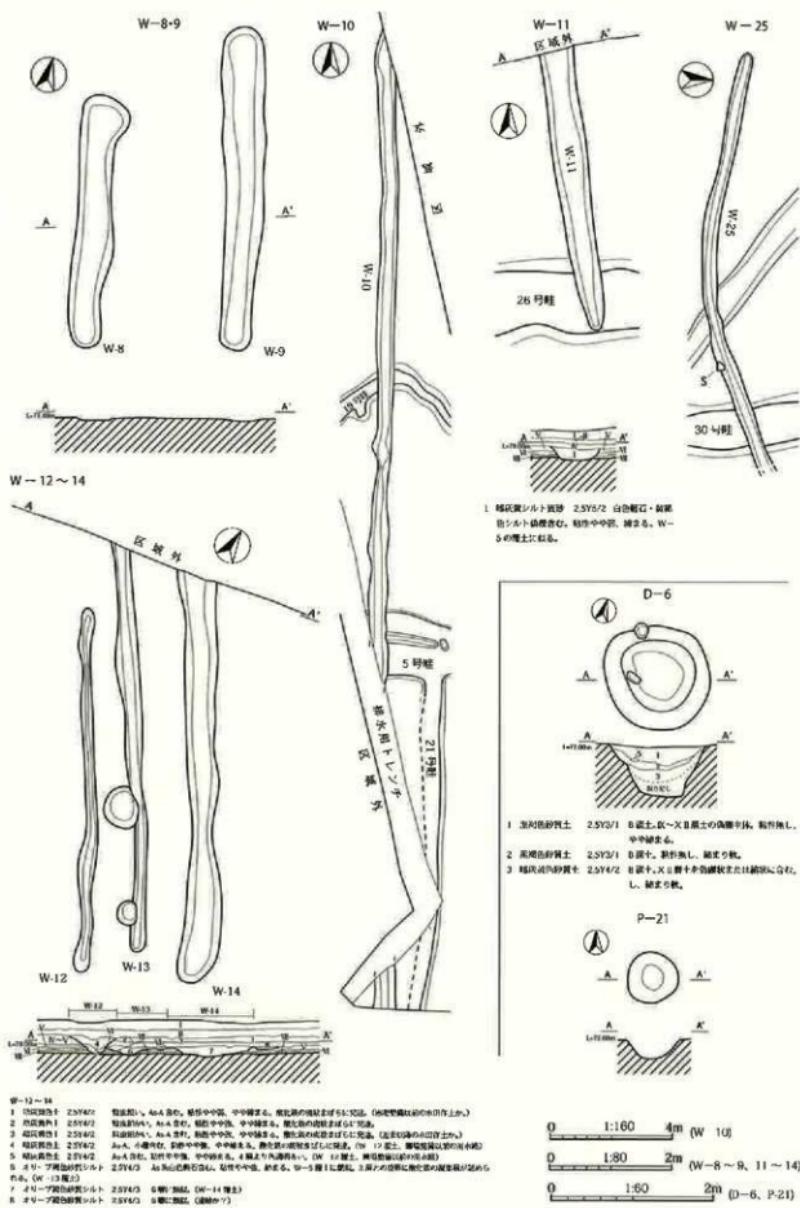


Fig.14 W-8~14・25, D-6, P-21

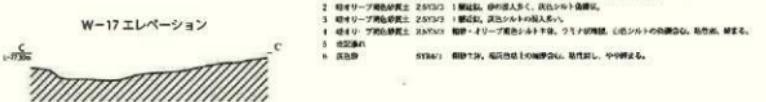
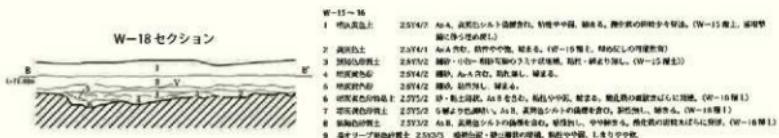
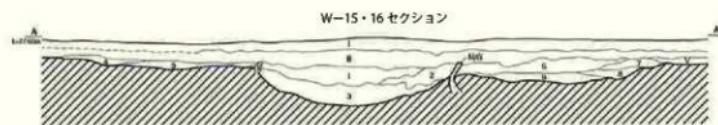
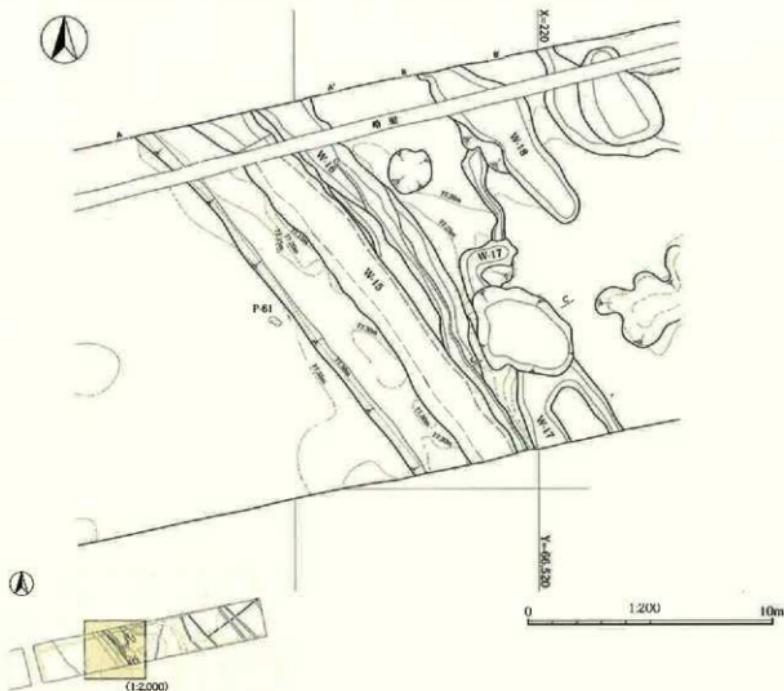


Fig.15 II区(1)

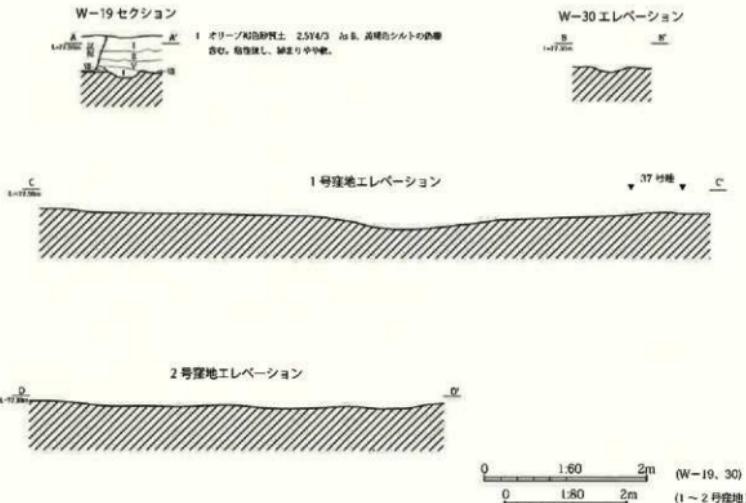
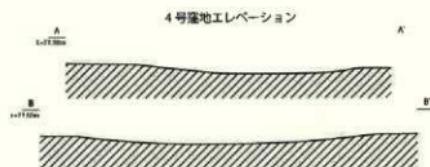
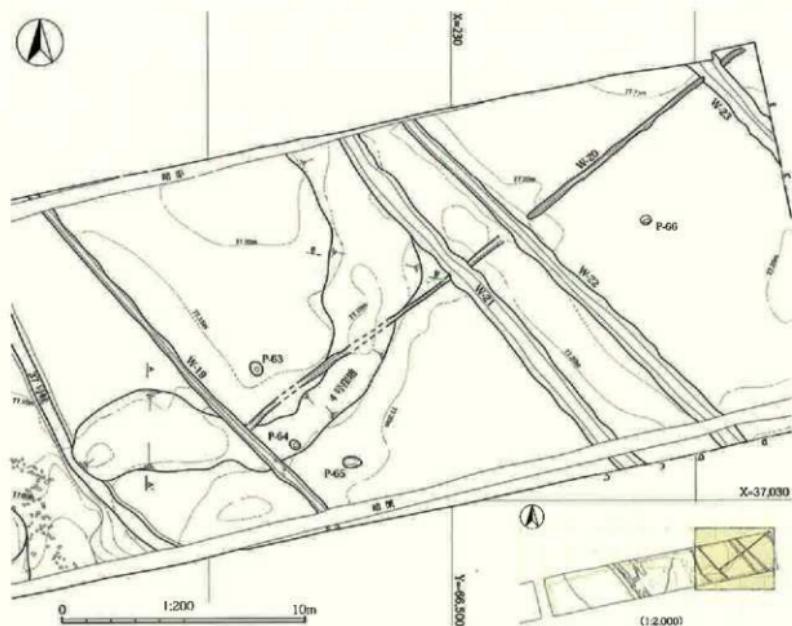
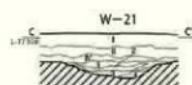


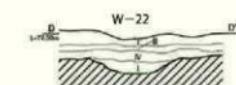
Fig.16 II区(2)



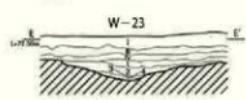
W-19 出土遺物実測図



1. 黄褐色砂質土 2.5m 2. 植生地帯。木根。黄褐色シルトの混在。切妻形。傾斜。腐泥。
2. 黄褐色土 2.0m 3. 灰褐色シルトの混在。切妻形。傾斜。
3. 黄褐色土 2.0m 3. 灰褐色シルトの混在。切妻形。傾斜。
4. 黄褐色土 2.5m 4. 黄褐色シルトの混在。切妻形。傾斜。



1. 黄褐色砂質土 2.5m 2. 植生地帯。木根。黄褐色シルトの混在。切妻形。傾斜。腐泥。



1. 黄褐色砂質土 2.2m 2. 植生地帯。木根。黄褐色シルトの混在。切妻形。傾斜。腐泥。
2. 黄褐色砂質土 2.2m 3. 植生地帯。木根。黄褐色シルトの混在。切妻形。傾斜。
3. 黄褐色土 2.0m 4. 植生地帯。

Fig.17 II区(3)

付編 自然科学分析

株式会社火山灰考古学研究所

早田 勉

1.はじめに

関東平野北西部の利根川扇状地の一部を構成する前綱合地（早田,2000）上に位置する南部拠点地区No.7T区における発掘調査では、層位や年代が不明な土層が検出された。そこで、地質調査を行うとともに、テフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を実施して、土層の層位や年代に関する資料の収集を行った。調査分析の対象は、試掘A～Cトレンチの3地点である。

2. 土層の層序

(1) 試掘Aトレンチ

試掘Aトレンチでは、下位より亜角礫を含む砂起じり灰白色シルト層（層厚17cm、礫の最大径78mm）、成層したテフラ層（層厚39cm）、暗灰色粘質土（層厚8cm）、やや色調が暗い灰色土（層厚9cm）、黒灰色土（層厚3cm）、細粒の白色軽石を含む灰色土（層厚6cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色土（層厚3cm）が認められる（図1）。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の白色結晶に富む粗粒の暗灰色火山灰層（層厚22cm）と、上部の粗粒火山灰混じりで成層した白色細粒火山灰層（層厚17cm）からなる。

(2) 試掘Bトレンチ

試掘Bトレンチでは、溝窓時には水没していたために詳細な層相を確認できなかったものの固結した堆積物が最下位に堆積している。その上位には、下位より亜角礫を多く含む灰色シルト質砂層（層厚13cm、礫の最大径23mm）、やや黄色がかかった灰色砂質シルト層（層厚16cm）、亜角礫を含む灰白色シルト層（層厚5cm、礫の最大径12mm）、鉄分に富む黄色シルト層（層厚1cm）、灰白色シルト層（層厚4cm）、細粒の白色軽石を多く含む灰色粗粒火山灰層（層厚7cm、軽石の最大径3mm）、砂混じり灰白色シルト層（層厚5cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚3cm以上）が認められる（図2）。

(3) 試掘Cトレンチ

試掘Cトレンチでは、下位より灰白色シルト層（層厚2cm以上）、灰色シルト質砂層（層厚5cm）、細粒の白色軽石を多く含む灰色砂層（層厚7cm）、亜円礫を含む灰白色シルト層（層厚3cm）、そして成層したテフラ層が認められる（図3）。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の白色結晶に富む粗粒の暗灰色火山灰層（層厚25cm）と、上部の粗粒火山灰混じりで成層した細粒の白色火山灰層（層厚7cm以上）からなる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

試掘A～Cトレンチにおいて、テフラ層またはテフラ粒子を含む可能性が高い土層から採取された8点を対象に、テフラ粒子の特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を実施した。テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

1) 砂分の含有度により試料5～7gを秤量。

2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試掘Aトレンチの試料2では、軽石、スコリア、火山ガラスは認められなかった。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石のほかに、やや粗粒の角閃石が含まれている。試料1には、白色のスponジ状軽石型ガラスが少量含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石のほかに、角閃石が認められる。

試掘Bトレンチの試料2には、軽石やスコリアは認められないものの、淡褐色のジェリー状のスponジ状軽石型ガラスが少量含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。試料1には、白色や透明のスponジ状や纖維束状の軽石型ガラスのほか、無色透明や灰色をおびた透明の分厚い中間型ガラスが比較的多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が認められる。

試掘Cトレンチでは、試料4および試料3に、白色や透明のスponジ状や纖維束状の軽石型ガラスが多く多く含まれている。ほかに、無色透明や灰色をおびた透明の中間型の重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が認められる。試料2は斜長石に富み、重鉱物として斜方輝石や单斜輝石が認められる。試料1には、無色透明や白色のスponジ状や纖維束状の軽石型ガラスのほか、無色透明の分厚い中間型ガラスが多く含まれている。重鉱物としては斜方輝石がわずかに認められる。

4. 考察

試掘Aトレンチでは、試料2から特徴的な軽石や火山ガラスが検出されなかったものの、斜方輝石のほかに比較的細粒の角閃石が認められたことから、この土層は少なくとも6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳淡川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 板口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)の降灰後に形成されたものと考えられる。このことから、その上位の試料1が採取された明色の土層については、たHr-FAあるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hir-FP, 新井, 1976, 板口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)に関係した火山泥流堆積物(早田, 1989, 2004)に関係して形成された土層の可能性が高い。

試掘Bトレンチの試料2に含まれる、淡褐色のジェリー状のスponジ状軽石型ガラスは、その特徴から、約1.9~2.4万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1996, 木公表)に由来すると推定される。ただし、層相から三次的にこの土層中に混在している可能性もある。いずれにしても、その下位にある硬くしまった堆積物については、層位から前橋泥流堆積物(新井, 新井, 1967)の可能性が高い。また、試料1が採取されたテフラ層は、火山ガラスの形態や色調、さらに火山ガラスの屈折率特性から、浅間大窪沢第1軽石(As-Okl, 約1.7万年前⁴⁾, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)に同定される。

このAs-Oklは、火山ガラスの形態や色調から、試料4および試料3が採取された土層中にも含まれている。また、試料2および試料1が採取された成層したテフラ層は、層位、層相、火山ガラスの形態や色調、重鉱物の組み合わせなどから、約1.3~1.4万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)²⁾に同定される。なお、下部の暗い色調については、テフラ層堆積後に地下水の影響で腐植が混入したものと推定される。

5.まとめ

前橋市南部発点地区No.7区の試掘A~Cトレンチにおいて、地質調査と室内実験(テフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定)を実施した。その結果、下位より前橋泥流堆積物、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9~2.4万年前¹⁾)、浅間大窪沢第1軽石(As-Okl, 約1.7万年前⁴⁾)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約

1.3~1.4万年前¹⁾)、占墳時代の榛名系テフラなどを検出することができた。

- *1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代 As-BP Group および As-YP に関する ¹⁴C 年代の較正年代については、最近後計が行われ、それらは概に約 1.9~2.9 万年前と、約 1.7 万年前の可能性が指摘されている。ただし、合わせて、今後信頼度の高い ¹⁴C 年代を収集して実際の年代を明らかにする必要も指摘されている(岡口ほか、2011)。
*2 蔽密には As-YP とは間に時間間隔を挟む別のテソラ層 (MK-13) とする考え(たとえば辻ほか、2004)もあるが、現段階では前橋台地周辺においてそのような時間間隔を示す堆積物は認められてない。

文 献

- 新井房夫 (1982) 南東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
新井房夫 (1987) 前橋北側の火山年代と前第 1 文化層. 地球科学, 70, p.46.
新井房夫 (1979) 関東地方北西部の第三紀時代以降の示標ナフジ層. 古生物学ジャーナル, no.53, p.41-52.
早田 勝・新井房夫 (1992) [小山灰アトラス-日本列島とその周辺]. 東京大学出版会, 276p.
早田 勝・新井房夫 (2003) 「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺」. 東京大学出版会, 336p.
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山. 黒鬼~前掛層のテソラ層序. 日本国第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
坂口 一 (1986) 榛名ニツヨ起源 FA・FP 層下の十郎原と須志原. 群馬県教育委員会編「荒城北系遺跡・今井神社古墳群・荒城古墳道路」, p.103-119.
岡口博幸・早田 勝・下岡義直 (2011) 群馬の旧石器時代のための基礎的研究-関東地方北西部における石器群の出土層位、テフラ層序、数値年代の整理と検討-. 群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要, 29, p.1-20.
早田 勝 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
早田 勝 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史編纂室編「群馬県史通史編」, 原始古代 I, p.35-129.
早田 勝 (1996) 東北地方~東北地方南部のボクテラの詫特徴. とくに御岳第一テフラより上位のテラについて-. 名古屋大学加速器質量分析計実績報告書, 7, p.256-267.
早田 勝 (2000) 火山活動の影響を受けた利根川流域地形. 貝塚英平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編「日本の地形 4 関東・伊豆・小笠原」. 東京大学出版社, p.191-194.
辻 一郎・宮地直哉・新井房夫 (2004) 南軽井沢地域の浅間火山テフラ層序と編年. 環境・災害史研究の基礎として-. 国立歴史博物館研究報告, 16, p.165-192.

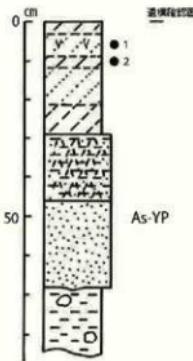


図1 試験Aトレンチの土層柱状図

凡例
●テラ分析試料の層位。
数字: テラ分析試料の層号。

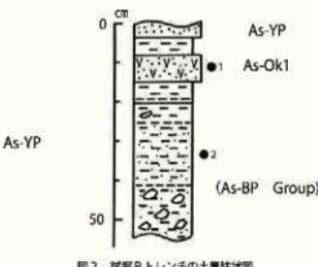


図2 試験Bトレンチの土層柱状図

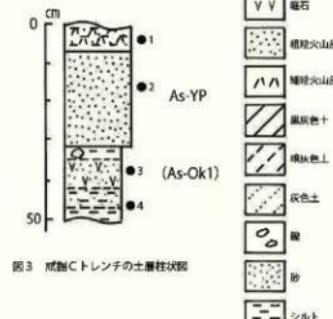


表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
		量	色	調	量	形	態	
試掘Aトレンド	1				*	pm (sp)	白	opx,cpx,am
	2							cpx,opx,am
試掘Bトレンド	1				**	pm (sp,fb),md	白,透明,灰	opx,cpx
	2				*	pm (sp)	淡褐	opx,cpx
試掘Cトレンド	1				***	pm (sp,fb),md	透明,白	(opx)
	2							cpx,opx
	3				**	pm (sp,fb),md	白,透明,灰	opx,cpx
	4				**	pm (sp,fb),md	白,透明,灰	opx,cpx

****: とくに多い。 ***: 多い。 **: 中程度。 *: 少ない。 最大厚の単位はmm。
 bw: バブル型。 pm: 構石型。 sp: スポンジ状。 fb: 繊維束状。 md: 中間型。
 opx: 斜方輝石。 cpx: 単斜輝石。 am: 角閃石。 () は量が少ないと示す。

表2 屈折率測定結果

試料(テフラ)	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定粒子数	
南部高地地区 No.7 工区・試掘Bトレンド・試料1	1.500-1.502	32	本報告

< 北関東地方北西部のむなも沿岸テフラ AT 降灰以降 >

浅間 A (As-A, 1783年)	1.507-1.512	1)
浅間 B (As-B, 1108年)	1.524-1.532	1)
榛名二ツ岳伊香保 (Hir-FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504	1)
榛名二ツ岳波川 (Hir-Fa, 6世紀初頭)	1.500-1.502	1)
	1.499-1.504	3)
榛名有馬 (Hir-AA, 5世紀)	1.500-1.502	4)
浅間 C (As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520	2)
浅間 D 輪石 (As-D, 約4,500年前 ¹⁾)	1.513-1.516	2)
鬼界フカホヤ (K-Ah, 約7,300年前)	1.506-1.513	1)
浅間御殿石 (As-Po, 約8,200年前 ¹⁾)	1.508-1.516	2)
浅間總社 (As-S), 約1.0~1.1万年前 ¹⁾	1.501-1.518	2)
浅間草津 (As-K)	1.501-1.503	1)
浅間板鼻黄色 (As-YP, 約1.65万年前)	1.501-1.505	1)
浅間大窓 2 (As-Oki2, 約1.6万年前 ¹⁾)	1.502-1.504	1)
浅間大窓 1 (As-Oki1, 約1.7万年前 ¹⁾)	1.500-1.502	1)
浅間白糸 (As-Sr)	1.506-1.510	1)
浅間秋叶 (As-Iig, 約1.9万年前 ¹⁾)	1.500-1.502	2)
浅間板鼻黄色 (群) (As-BPGroup)	上部 中部 下部	1.515-1.520 1.508-1.511 1.506-1.515
始良 Tn (AT, 約2.8~3万年前)		1.499-1.500

1) 町田・斎井 (1992,2003), 2) :早田 (1995), 3) :早田 (未公表), 4) 町田ほか (1980).

本報告および3): 疎夜変化型屈折率測定装置 (RIMS2000).

3) 以外: 敦新工業大郡大学名譽教授による測定は一定帯屈折率測定法.

¹⁾ I: 放射性炭素 (¹⁴C) 年代.



1. 南部拠点地区遺跡群No.7 全景 北西から



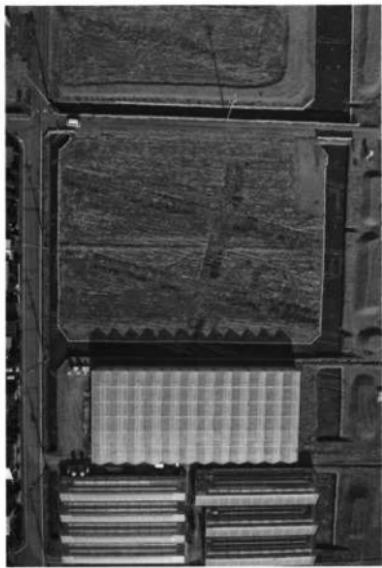
2. 南部拠点地区遺跡群No.7 とその南を流れる利根川 北東から



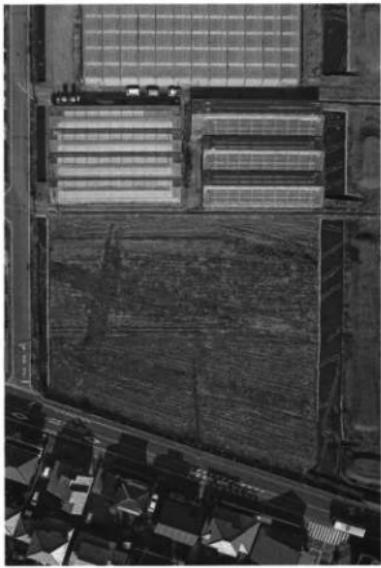
1. 発展する前橋南 IC 周辺と南部拠点地区遺跡群No.7



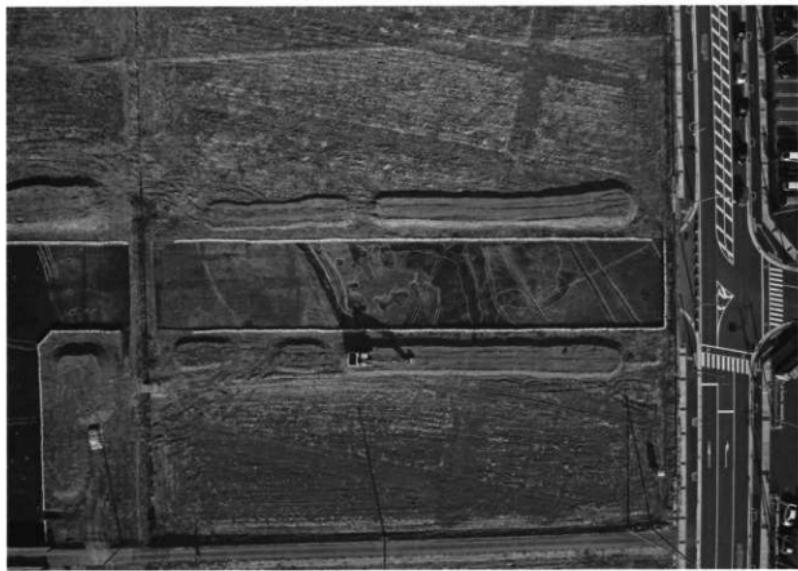
2. I区a全景 上が北（調査区北西隅が坪交点）



1. I区 (b～c、e～f) 全景 上が北



2. I区 (d、g) 全景 上が北



3. II区全景 上が北



1. As - B 下水田跡（I 区 a） 南西から



3. As - B 下水田跡（I 区 g） 北東から



5. 水口へ向かう浅い小溝（I 区 a） 東から



6. 畦畔の奥側の田面は凹凸が顕著、手前は平坦



2. As - B 下水田跡（I 区 f） 南東から



4. As - B 下水田跡（I 区 g） 南東から



7. 田面に残る小溝（W-2） 南東から



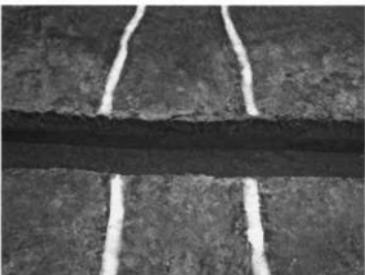
1. 田面に残る小溝 (W-3)



2. 田面に残る浅い溝 (W-8・9) 北東から



3. 小溝を伴う坪界畦畔 (25号畦) 北から



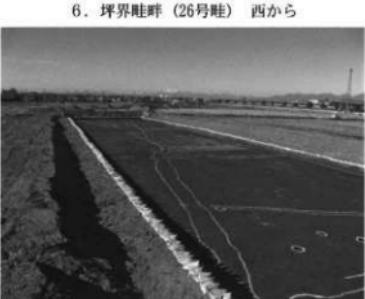
5. 坪界畦畔の断ち割り (25号畦) 南から



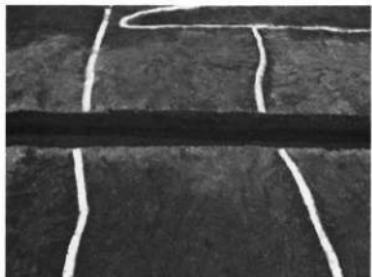
6. 坪界畦畔 (26号畦) 西から



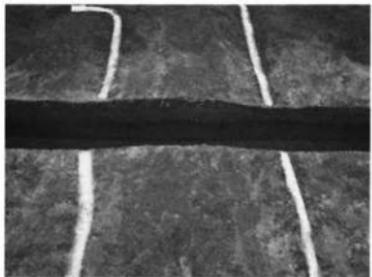
4. 小溝を伴う坪界畦畔 (25号畦) 南から



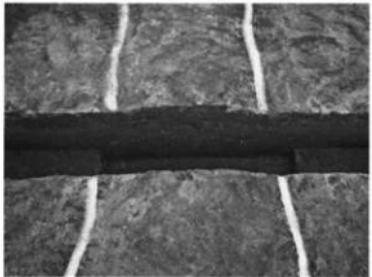
7. 坪界畦畔 (26号畦) と浅間山 東から



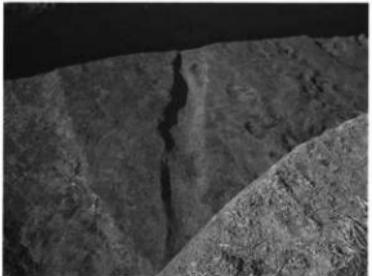
1. 坪界畦畔の断ち割り (26号畦 AA') 東から



2. 坪界畦畔の断ち割り (26号畦 BB') 東から



3. 坪界畦畔の断ち割り (26号畦 CC') 東から



6. W-5 全景 (I区b西) 東から



4. 坪境に沿って流れる溝渠群 北から
(I区b西、W-1・4・5・6)



5. W-1・4 全景 (I区b西) 東から



7. W-6 全景 (I区b西) 東から



1. 坪境の土層断面に観察される溝跡の重複



3. W-5 の上層に重なる水田層（I 区 b 中央）



5. W-1 セクション（I 区 e） 東から



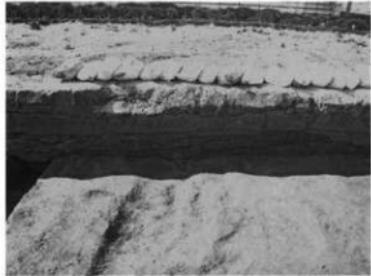
7. W-5 セクション（I 区 e） 東から



2. 坪境を流れる溝渠群（I 区 b 中央） 東から



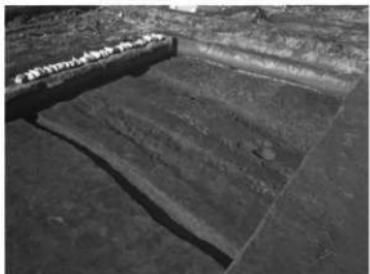
4. 坪境に沿う溝渠群のセクション（I 区 e） 東から



6. W-4 セクション（I 区 e） 東から



8. 断面に観察される坪界畦畔（I 区 e） 東から



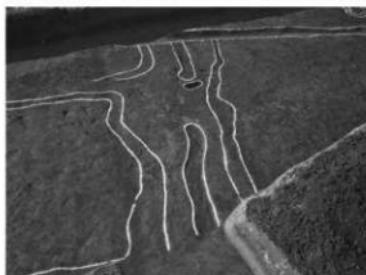
1. 坪境に沿って流れる溝渠群（I 区 c）南東から



2. 小溝を伴う坪界畦畔（I 区 d、5号畦）東から



3. 5号畦断ち割り（I 区 d） 西から



4. 小溝を伴う坪界畦畔（I 区 g、5号畦）東から



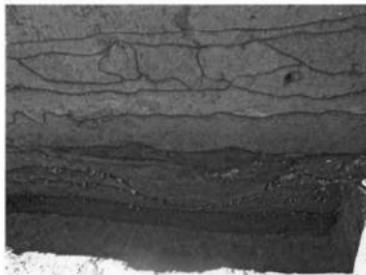
5. 坪界畦畔（I 区 f、10号畦） 東から



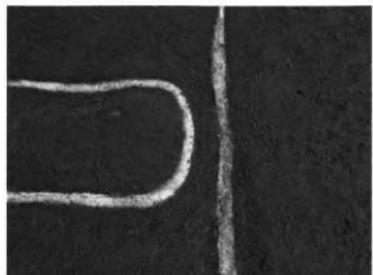
6. 10号畦セクション AA' 南から



7. 10号畦セクション BB' (1) 東から



8. 10号畦セクション BB' (2) 東から



1. I区水口状遺構B 西から



2. I区水口状遺構C 西から



3. I区水口状遺構D 西から



4. I区水口状遺構E 東から



5. I区水口状遺構F 西から



6. I区水口状遺構G 西から



7. I区水口状遺構H 西から



8. 表土除去および水田跡検出作業 西から



1. W-10全景 北から



4. W-12・13・14全景 北から



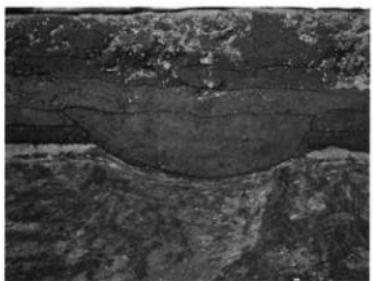
2. W-11全景 北から



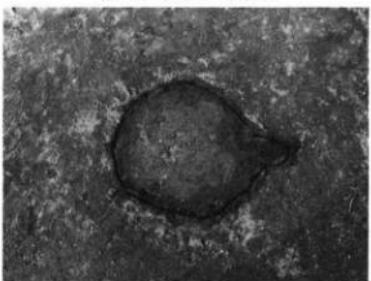
5. W-12・13・14セクション 南から



6. D-6全景 東から



3. W-11セクション 南から



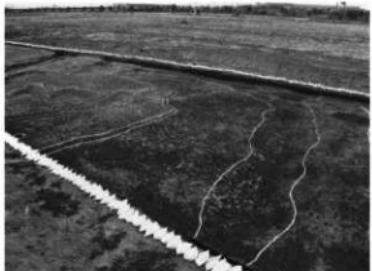
7. P-21土層の貫入状況 北から



1. II区全景 北東から



2. II区全景 北西から



3. As - B 直下に検出した窪地 (1号窪地) 南から



4. 1号窪地の堆積状況 南東から



5. 1号窪地 As - B 堆積状況 南から



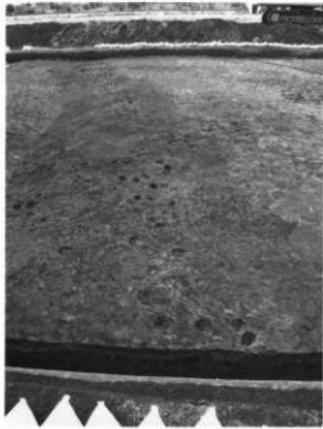
6. As - B 直下に検出した 4号窪地 北東から



7. 窪地に並走する畦畔 (37号窪) 北から



8. As 一直下に検出した W-30 北東から



1. 1号窓地脇の足跡痕（1） 南から



2. 1号窓地脇の足跡痕（2） 南から



3. W-15・16全景 北から



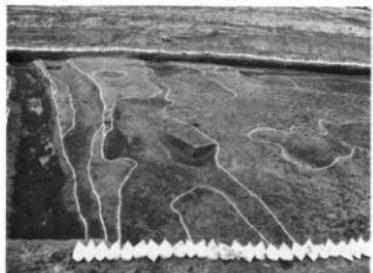
4. W-15セクション 南から



5. W-16セクション 南から



6. W-17・18全景 北から



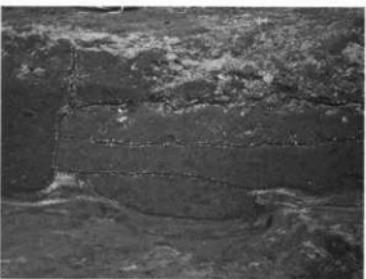
1. W-17・18全景 南から



2. W-18セクション 南から



3. W-19全景 北から



4. W-19セクション 南から



6. W-20全景 北東から



5. 溝底面から出土した宝篋印塔 (W-19) 北から



7. II区調査風景 東から



1. W-21・22全景 北から



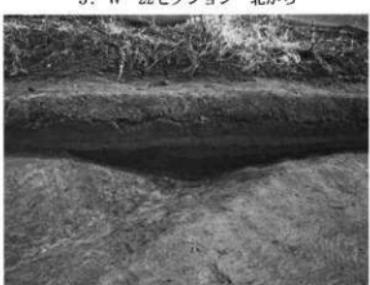
2. W-21セクション 北から



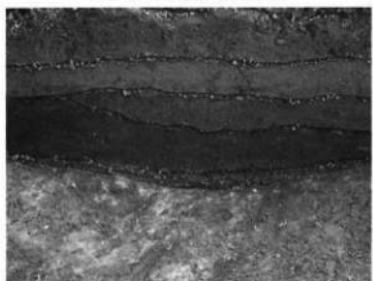
3. W-22セクション 北から



4. W-23全景 北東から



5. W-23セクション 西から



6. W-23セクション(近接) 西から



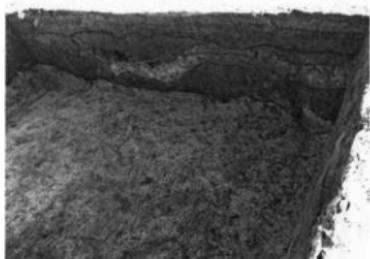
7. 2号窪地 北東から



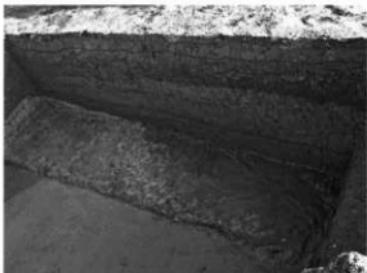
1. I区基本層序 南から



2. I区基本層序 北から



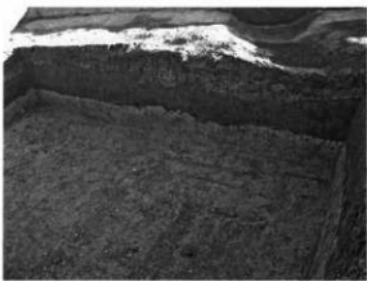
3. II区試掘トレンチA 北西から



4. II区試掘トレンチB 北西から



5. II区試掘トレンチB（近接） 北西から



6. II区試掘トレンチC 北西から



7. I区P-21出土遺物



8. II区W-19出土遺物

抄 錄

ふりがな	なんぶきよてんちくいせきぐんなんばーな							
書名	南部拠点地区遺跡群No.7							
副書名	前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	福出賀之 櫻井和哉							
編集機関	山下工業株式会社 〒371-0244 前橋市鼻毛石町207-8							
発行機関	前橋市教育委員会文化財保護課 〒371-0853 前橋市総社町3-11-4							
発行年月日	2014年3月26日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南部拠点地区 遺跡群 No.7	群馬県前橋市鶴光路町 121-2、121-3、122-5、 959-2、960-3 前橋市鬼里町 1002-3、 1003-2、1003-3、 1004-2、1005-3、 1006-2、1006-3、 1007-3、1007-6、 107-7	10201	25G81	36° 19' 49"	139° 05' 31"	2013.11.18～ 2014.01.22	5860m ²	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南部拠点地区 遺跡群 No.7	生産跡	古代	水田跡(1面)、溝跡7条、 窓地2基		上簡器小片、陶磁器小片、宝篋印塔		As-B直下に柔田坪界に対応する畦跡、 溝跡を検出した。	
		中世～現代	溝跡23条、上坑7基、 ビット66基、窓地2基					

南部拠点地区遺跡群No.7

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26年3月20日 印刷

平成26年3月26日 発行

編集／山下工業株式会社
発行／〒371-0853 前橋市教育委員会
群馬県前橋市総社町3-11-4
TEL 027-280-6511

印刷／朝日印刷工業株式会社